

子どもの貧困と家族支援

大阪公立大学 スクールソーシャルワーク評価支援研究所 所長
現代システム科学研究科／現代システム科学域 教育福祉学類 教授
組織mail: gr-kyik-bssw@omu.ac.jp 山野則子

<http://www.human.osakafu-u.ac.jp/ssw-opu/>

<研究・社会活動>

日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員、日本学術会議 特任連携会員、世界人権問題研究センター部長

<国の委員>

文部科学省 第9期中央教育審議会委員、家庭教育支援検討会座長（2016年）

内閣府 子どもの貧困対策に関する検討会（2014）／子どもの貧困対策に関する有識者会議 構成員（2016年～）

貧困状態の子供の支援のための教育・福祉等データベースの構築等に向けた研究会 座長（2021年）

孤独・孤立対策の重点計画に関する有識者会議 構成員(2021年)

厚生労働省 社会保障審議会児童部会委員（2017年度～）

デジタル庁 こどもに関する各種データの連携に係るガイドライン策定検討委員会委員（2022年度～）

<国関係の委託研究>

2017年度～内閣府委託：沖縄子供の貧困緊急対策事業分析・評価・普及事業

2020年度 文部科学学省委託：SC及びSSWの常勤化に向けた調査研究

厚生労働省特別研究：**コロナ禍における子どもへの影響と支援方策のための横断的研究**→報道10以上

2021年度～科学技術振興機構（JST）・RISTEX「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム」

<主な著書>

「スクールソーシャルワークハンドブック」（監修 明石書店 2020）

「子どもの貧困調査」（編著 明石書店 2019）

「学校プラットフォーム」（単著 有斐閣 2018）

「エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク」（編著 明石書店 2015）

「子ども虐待を防ぐ市町村ネットワークとソーシャルワーク」（単著 明石書店 2009）

Key Word : すべての子ども、SSW、コラボレーション

- 1. 子どもの実態（すべての子ども対象の必要性）
 - 「見えない」の広がり
- 2. 学校の実態（全数把握の意味）
 - 組織として「見えにくい」
- 3. **スクリーニングシステム（起点）** メゾアプローチ
 - 学校組織に子どもの変化に気づき動きにつなぐ機能
- 4. **学校プラットフォーム（拠点）** マクロアプローチ
 - 学校組織において身近に支援が受けられるよう場となる機能

子どもの実態、未然防止の意味

**SSWは現実的
ニーズに対応する！**

コロナ禍でどんなことが起きている？

- 虐待、無心、家庭内暴力（DV含め）、地域の方の訪問時の罵声、、、→その背景は。。。。
- 厚労省の調査結果→精神的負担感増大、不登校へのリスク3分の1

さまざまな事件から・・・

- 小6の後半の転入
- 小3で3か月の赤ちゃんとお兄ちゃんを連れた父
→気づけなかった

これらが、見えない・・・、見えにくい

新型コロナウイルス感染症による子どもの孤立問題の深刻化

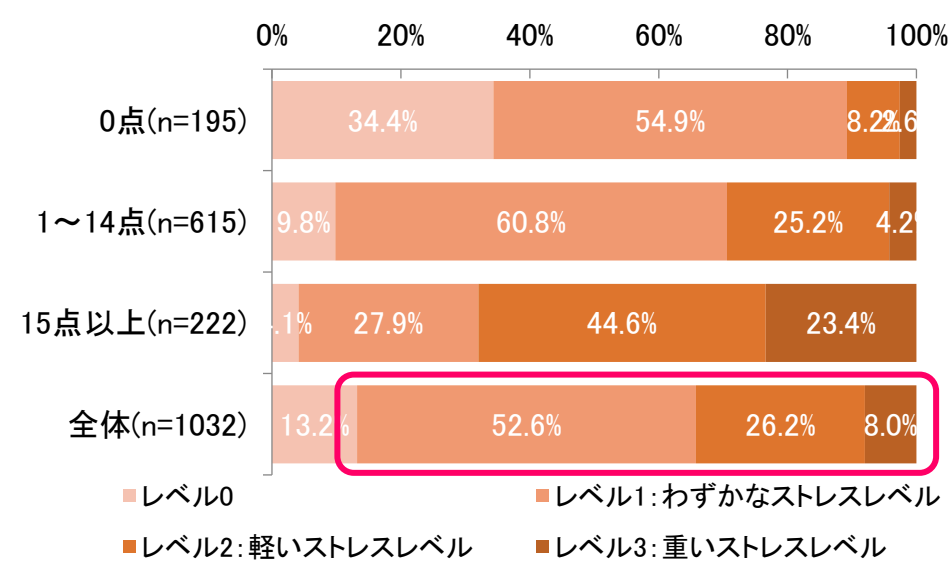


図1.親の精神的健康状態別に見た、子どものストレスレベル

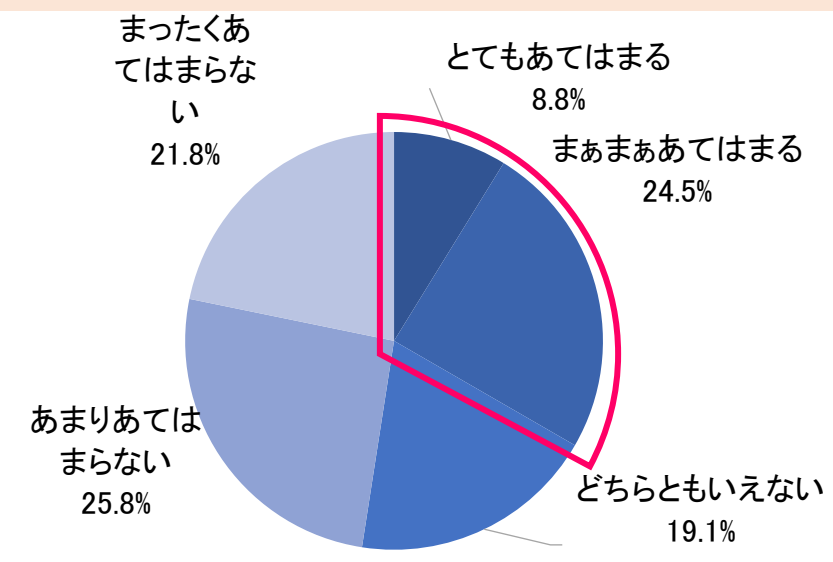


図2.学校再開後の通学への気持ち：つらいと回答した（「とてもあてはまる」と「まあまああてはまる」の合計）

- ストレスを抱えている子ども = **86.8%**
- 特に保護者の精神的健康状態が良くないほど、子どものストレスレベルは高い
- 学校への行きづらさを感じている子ども = **約3分の1**

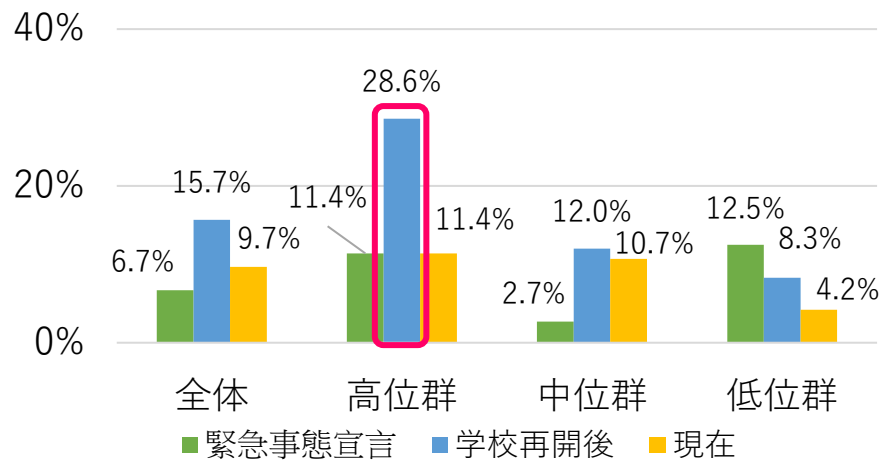


図3.児童の性的な問題：「増えた」・「少し増えた」の合計（感染状況別）

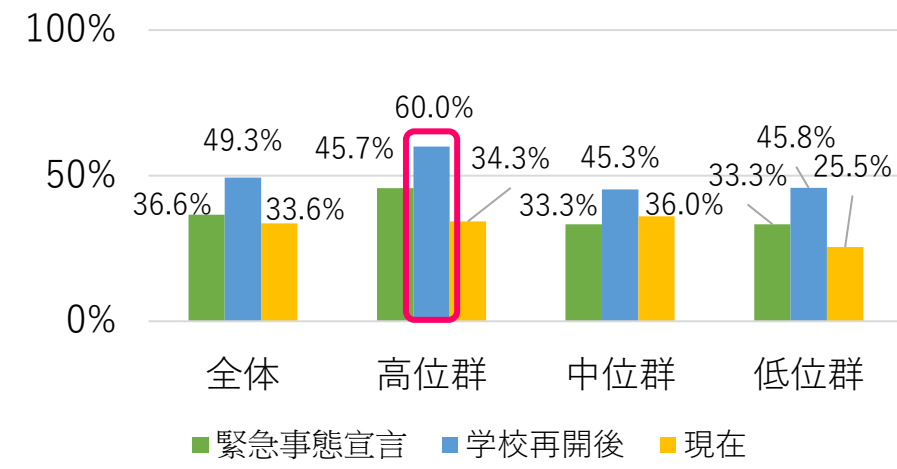


図4.児童のゲーム依存に関する相談：「増えた」・「少し増えた」の合計（感染状況別）

- 児童の**ゲーム依存**や**性的な問題** = 顕著に増加
- 特に**感染拡大高位群**における学校再開後（2020年6～9月）の増加が著しい
- **学校再開後**に子どもの実態が**顕在化**した

大阪府子どもの生活に関する実態調査（2017） 集計・分析について

1. 等価可処分所得により困窮の程度を分類

世帯の可処分所得（収入から税金や社会保険料を引いた実質手取り分の収入）を世帯人数の平方根で割った額

等価可処分所得
（最大値）

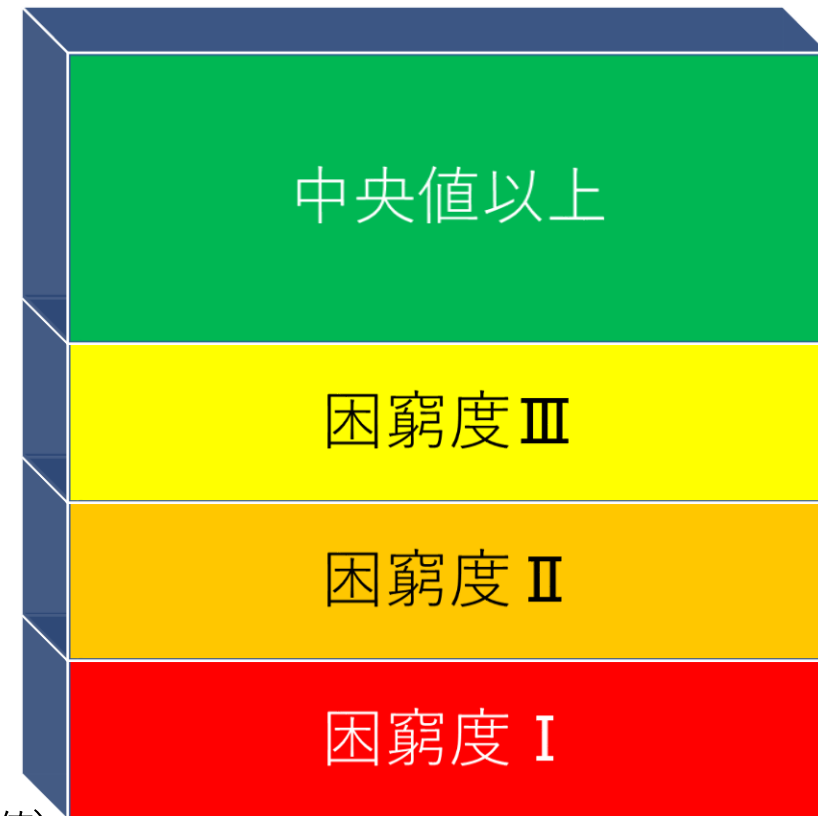
——— 中央値
（端から数えて真ん中に位置する値） ———

——— 中央値の**60%** のライン ———

——— 中央値の**50%** のライン ———

等価可処分所得
（最小値）

～回答者の合計 99,809人（62.3%）～
小5・中2の子ども 50,106人（62.5%）
小5と中2の保護者 49,703人（62.0%）



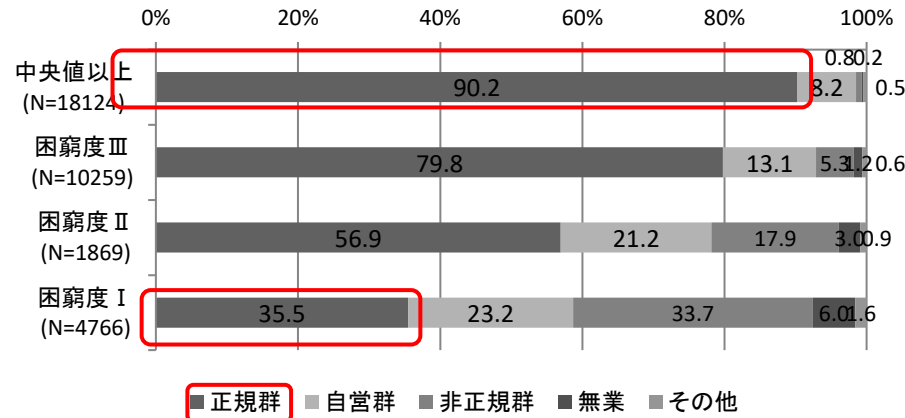
貧困調査 では...

※本ページは「43市町村」の結果を掲載。「30市町村」の結果との比較はP 3 2～3 3を参照

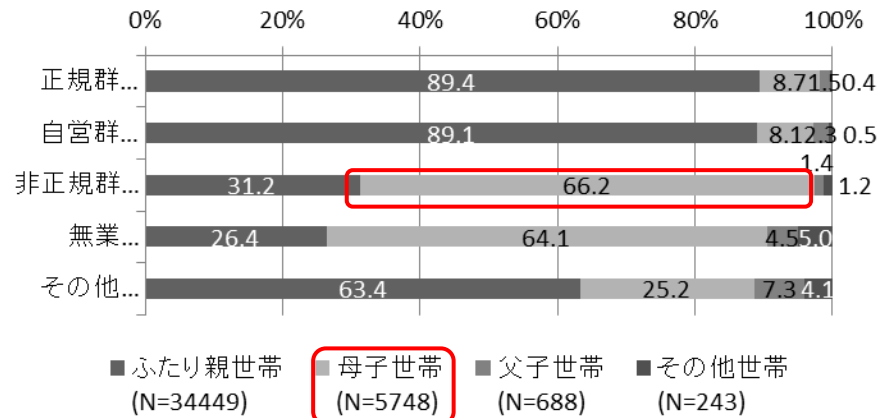
43市町村

調査結果から分かったこと

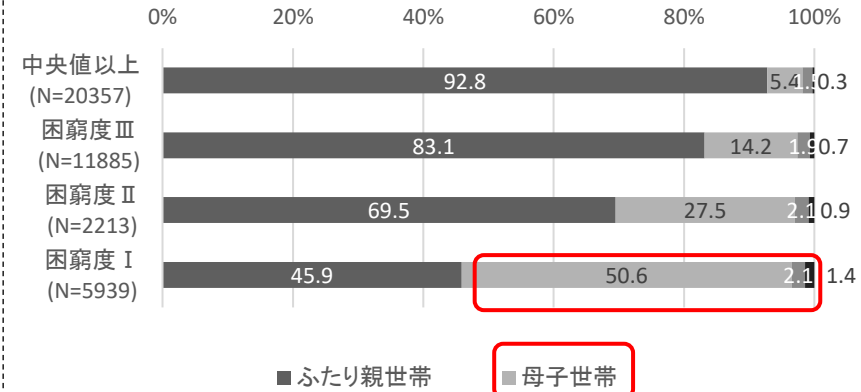
◇困窮度Ⅰの世帯における正規雇用の割合は約4割である。



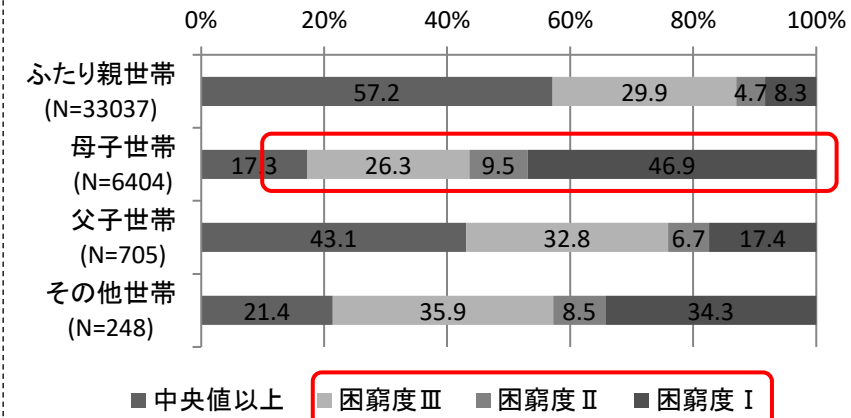
◇非正規群に占める母子世帯の割合は約7割である。



◇困窮度Ⅰの5割が母子世帯である。



◇母子世帯の約8割が等価可処分所得の中央値に満たない。



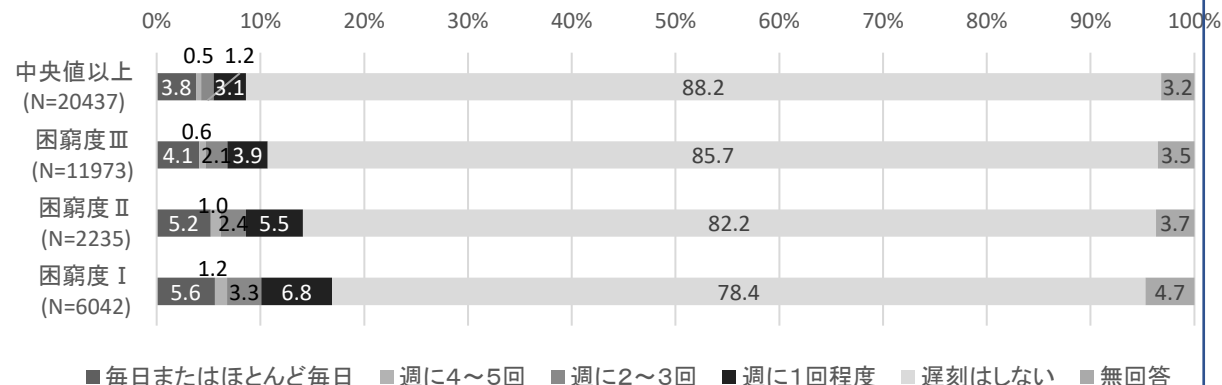
母子家庭のしんどさ！

表1. 世帯別労働状態と制度利用

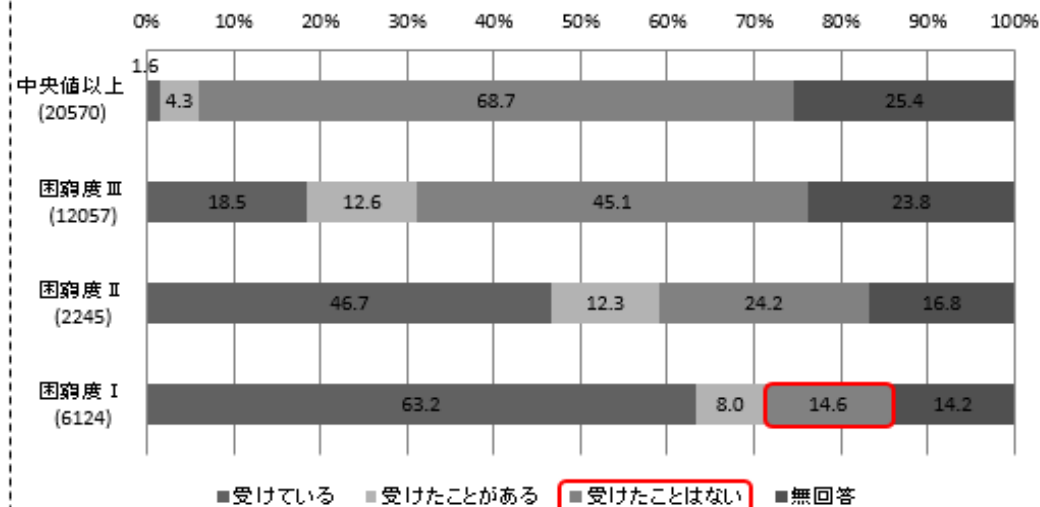
出所: 大阪府子どもの生活実態調査「調査報告書を踏まえた課題と対応の方向性の整理について」より抜粋



◇困窮世帯ほど遅刻する割合が高い。



◇困窮度Ⅰの世帯で就学援助を受けたことがない世帯がある。



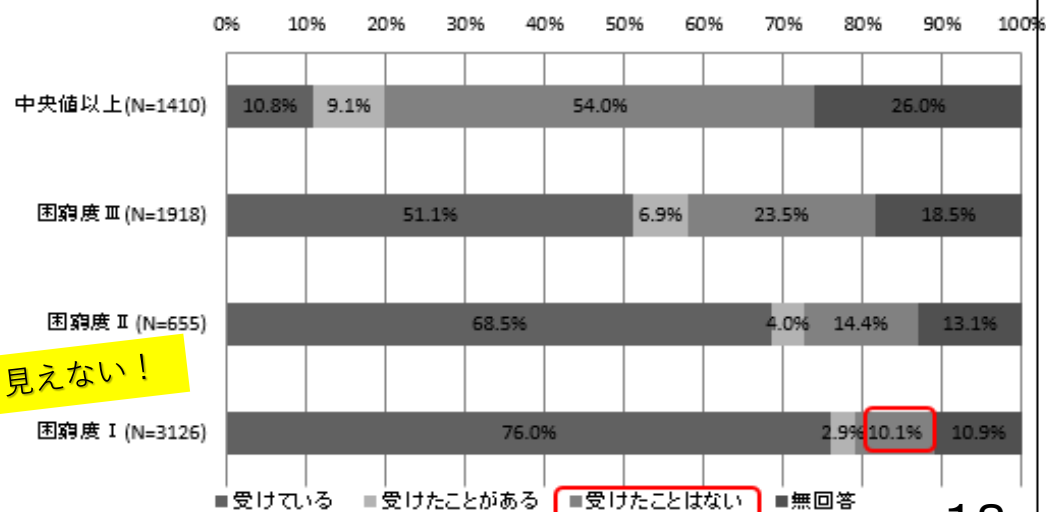
◇子ども自身の進学希望について、困窮世帯ほど「中学・高校」の割合が高い。



家庭
支援

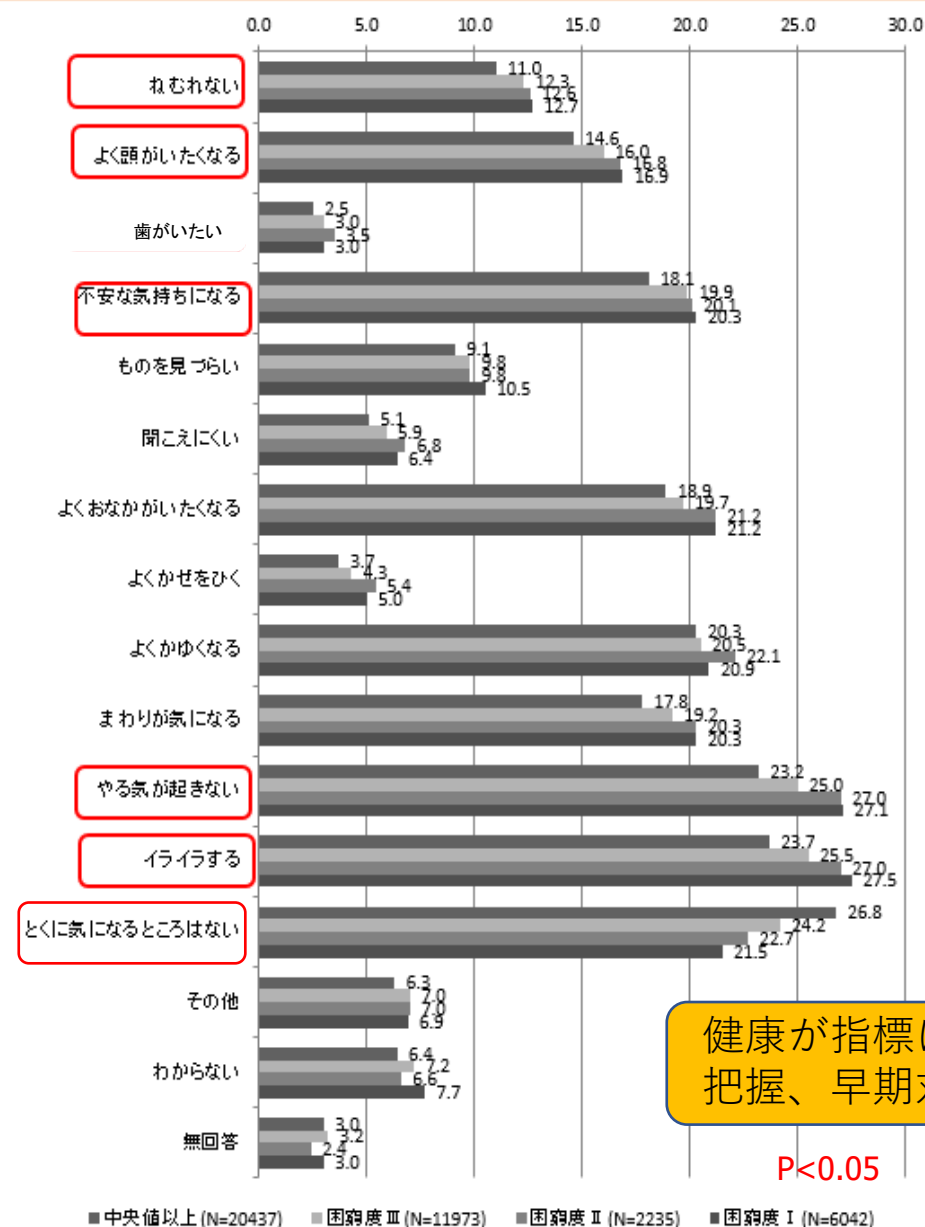
届かない、見えない!

◇困窮度Ⅰのひとり親世帯で児童扶養手当を受けたことがない世帯がある。

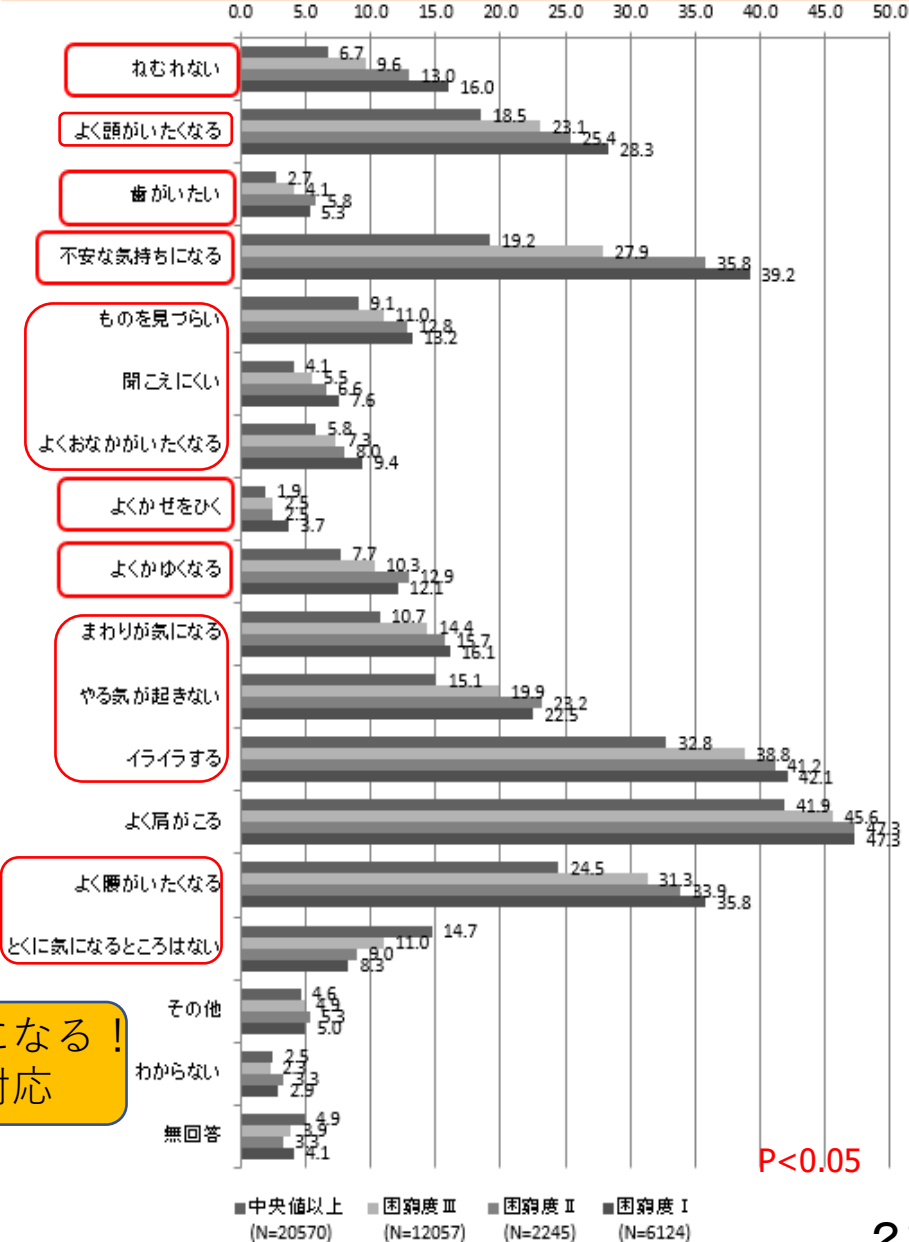


P<0.05

◇子どもの心身で気になることについては、困窮世帯ほど割合が高い傾向にある。



◇保護者の心身で気になることについては、困窮世帯ほど割合が全体的に高い。



■調査結果から分かったこと（小5、中2のいる世帯）

◇困窮度別に見た、授業以外の勉強時間と学習理解度の関連

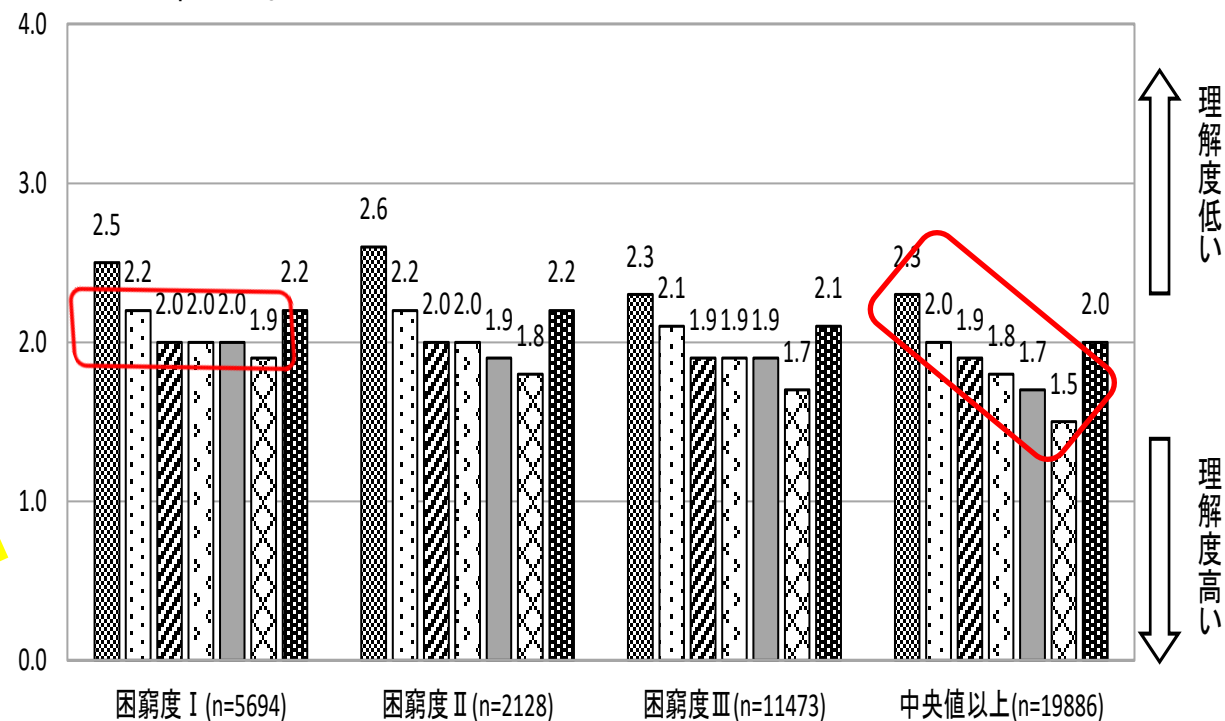
府：中央値以上は、勉強時間が長ければ長いほど理解度があがる。困窮度が明確な高い方が成果が見れない。

能勢：府とほぼ同様の傾向が見られ、さらに全くしなくても中央値以上は理解度は高い。しかし困窮度が高くなるとばらばらで傾向

が一定しない。学習成果が見られなかった。

<大阪府内全自治体>

- まったくしない
- ▨30分以上、1時間より少ない
- 2時間以上、3時間より少ない
- わからない
- 30分より少ない
- 1時間以上、2時間より少ない
- ▨3時間以上



家庭状況がヒューマンキャピタルに影響！

参考3 保護者の意識や関与と児童生徒の学力(続き)

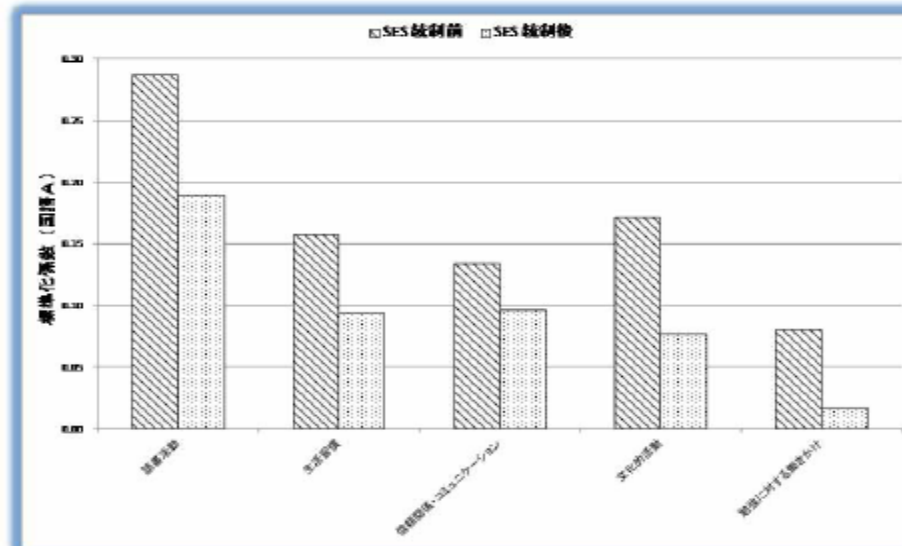


図 保護者の関与と学力(国語A)の関連(小6)

数値は、重回帰分析による β 。数値が大きいほど学力と関連。SES統制後に数値が小さくなる項目はSES統制前の数値が見かけ上の関連を示していたことを表す

- 家庭における読書活動、生活習慣に関する働きかけ、親子間のコミュニケーション、親子で行う文化的活動は、いずれも学力にプラスの影響力。とくに家庭における読書活動が子どもの学力に最も強い影響力を及ぼす。その影響力は中学校に比べ小学校で大きい → 第2章 図表2-2-7 図表2-2-11
- 上記の保護者の行動・関わり方はいずれもSESを統制すると学力への影響力が小さくなる。ただし読書活動の影響力はなお残る

1－①見えない貧困、孤立の影響

孤立、貧困



子育て層全体の3分の1が孤立（原田ほか2004）、貧困が15～30%

児童虐待



孤立・不安が虐待へ影響の可能性大（山野2005）

貧困の30%以上が虐待へ（東京都保健福祉局 2005）

問題行動



非行のうち70%が虐待（法務総合研究所2001）

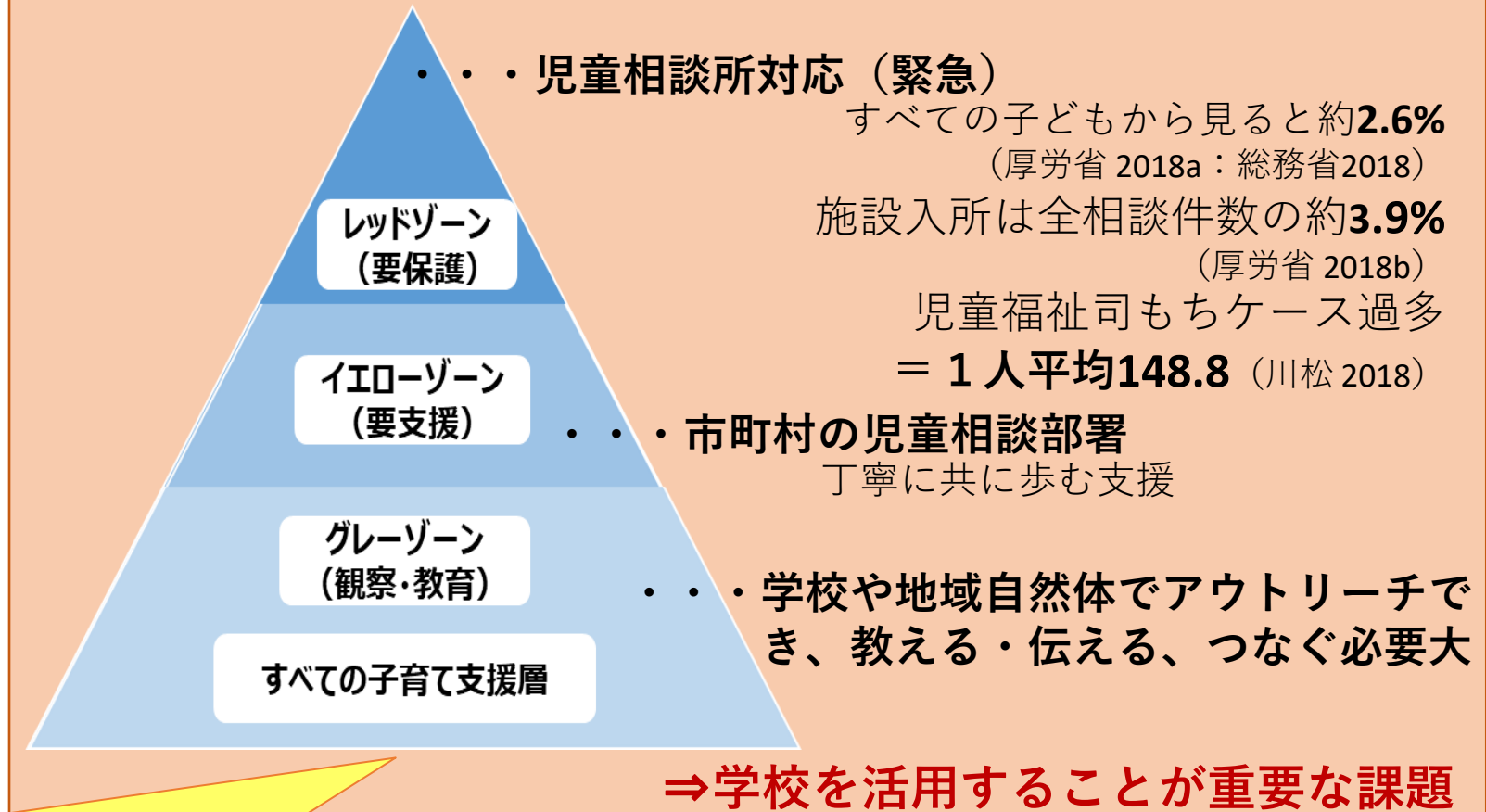
ネグレクトの50%台（中）から30%台（小）が
不登校（安部2011）

学力低下

1-② 対応の構造の現状 ➡ つなぐ人材、方法、場へ

- 児童相談所の対応は義務教育年齢の全校児童数の約1%
(山野ほか 2000)
⇒15.42% (貧困：就学援助率) や**34.8%** (孤立) に対応不可能
- 就学後、**30%をつかめるのはすべての子どもが通う学校**である。
- 学校に全数把握機関としての位置づけが必要

児童相談所が対応するのは極一部



スクールソーシャルワーク から 学校スクリーニング (発見とつなぐ方法)
(つなぐ人材) 学校プラットフォーム★ (場)

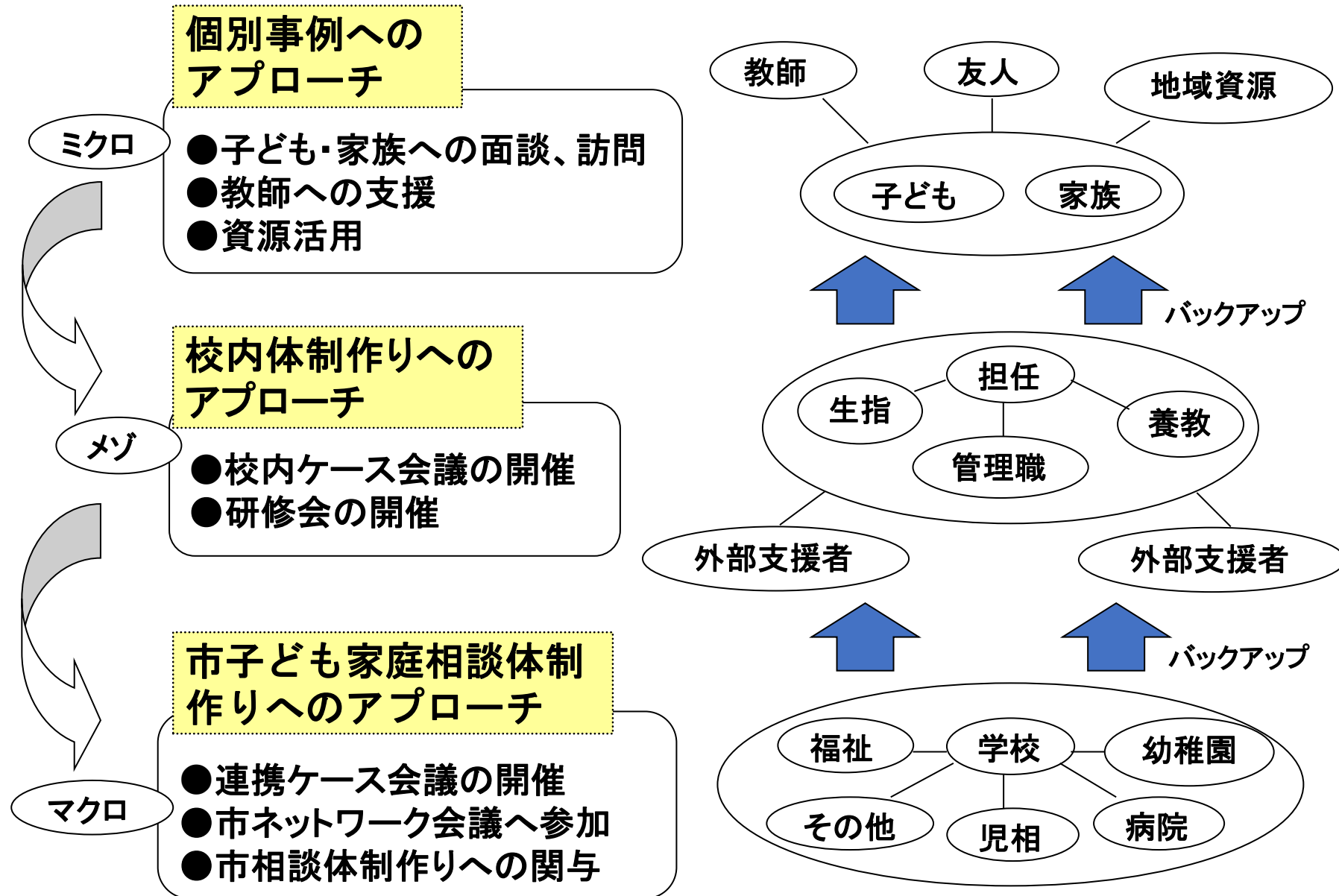
ソーシャルワークとは

- ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知¹を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける（国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）の2014年の新定義）。生活の視点を重視。

スクールソーシャルワーク（SSW）とは

- 学校をベースにソーシャルワークを展開
- 教師の仕事を理解の上、様々な代弁、調整を行う

SSW：ミクロ・メゾ・マクロ実践（山野,2006）



1.経緯と成果 SSWの制度化

★ポイント：
制度化には文科省や
教育委員会を巻き込
む必要性大（開発モ
デル自体が教育委員
会用も含んでいる。国
への発信）

エビデンスに基
づくSSW事業
構築研究※

研究会の活動

あり方研究会・SSW評価支援研究所

- ・プログラムモデル作成
- ・実践家参画型意見交換会
年間2回WS

JST：社会実装PJの採択

- ・モデルのWEBでの展開
- ・シンポジウム（300人）開催
- ・本の出版
- ・評価支援研究所の立ち上げ
→法務省の評価支援アドバイザー
- ・FA養成ワークショップ

- ・プログラム評価（アウトカム
評価、RCT）、エビデンス公開
- ・出向き型実装（東京実施）
- ・子どもの貧困調査の受託
（大阪府・大阪市他10万件）

- ・SSW評価委支援研究所の形式
強化（要項・規約の作成）
- ・出向き型実装（北海道実施）
- ・子どもの貧困調査受託（橋
本）、貧困事業評価受託（内閣
府沖縄）、事業実施（大阪府）

国からの受託

<委員>

- ・内閣府子どもの貧困対策
検討会議委員
- ・文部科学省CSのあり方研究委員

<文部科学省 受託研究>

- ・家庭教育の総合的推進に関する
研究調査
- ・いじめ対策等生徒指導推進事業

<委員>

- ・文部科学省 学校における教育相
談等に関する調査研究会議委員
- ・文部科学省 家庭教育支援手法等
に関する検討委員会 座長
- ・内閣府 子供の貧困対策に関する有
識者会議委員

<委員>

- ・文部科学省 家庭教育支援の推進
方策に関する検討委員会座長

<委員>

- ・文部科学省 中央教育審議会本委員
- ・厚生労働省 社会保障審議会児童部
会委員

参加型WSによる評価手法の実装

国の動き

山野：文科省全国教育委員会SSW
担当者会レク（2014年9月）

↓ マニュアルの必要性主張

文科省 SSWガイドライン
作り開始

山野：文科省中教審チーム学校
部会プレゼン（2015年8月）

↓ 「エビデンスに基づくSSW」
リーフレットが引用

文科省中教審答申
（2015.12.21）

文科省SSWガイドライン完成



山野：総理官邸での教育再生実行
会議でプレゼン（2016年12月）



学校教育法施行規則改正

2 0 1 2



2 0 1 4



2 0 1 5



2 0 1 6



2 0 1 7

SSWの制度化とい
う実践実装に成功
を見せた

誰一人取り残さない支援の仕組みづくりへ

スマートシティの実現へ：自治体＋研究機関＋地域



子どもの社会的孤立・孤独を予防するシステムの開発

【国】

教育と福祉のDB
スクリーニング実験

ビジョン

子どもに安心を提供できる、
持続可能な社会システムの実現

『能勢町、神戸市ほか』

スクリーニング
実施契約

「学校」での
展開

◆課題

◆課題①：子どもが声をあ
げられず周囲が気づかない

◆課題②：学校組織が
教師の抱え込みを生む

◆課題③：身近な支援が認識され
ず必要な子どもに届かない

■スモールスタート期間

AIスクリーニングYOSS
モデルの完成

メカニ
ズム知る

介入評価

AI熟練
データ蓄積

スクリーニング進行人材
養成講座のモデル作り

自治体・学校・SSWへ
／ネットワーク構築

個人情報保護のボトルネッ
ク対応マニュアル作成

■本格実施期間

AIスクリーニングYOSS
の検証と蓄積

スクリーニング：SSW養
成講座／教員講習モデル
実用化

プロセスモデルの試行と
自治体の評価キャパシ
ティ形成

個人情報保護のボトル
ネック対応マニュアル完
成

実用化！

AI技術を用いた
スクリーニングシス
テム を学校現場で運用
することにより、
子どもの課題を
システマティックに解消。

1. 恥の文化の払拭

子どもへの教育だけでなく、大
人や社会が意識変容すること
で、子どもがありのままを出せ、
大人が声なき声を拾える、誰一
人取り残さない社会を構築。

2. 自然に変容する組織へ

学校にて子どもの課題把握や
支援策を検討するシステムを確
立。システムにのることので
データに基づく評価や決定が実現。

3. 地域とつなぐ人材養成、 予防ネットワークづくり

地域とつなぐSSW人材養成、
予防のためのネットワーク構築、
プロセスマニュアルの確立。

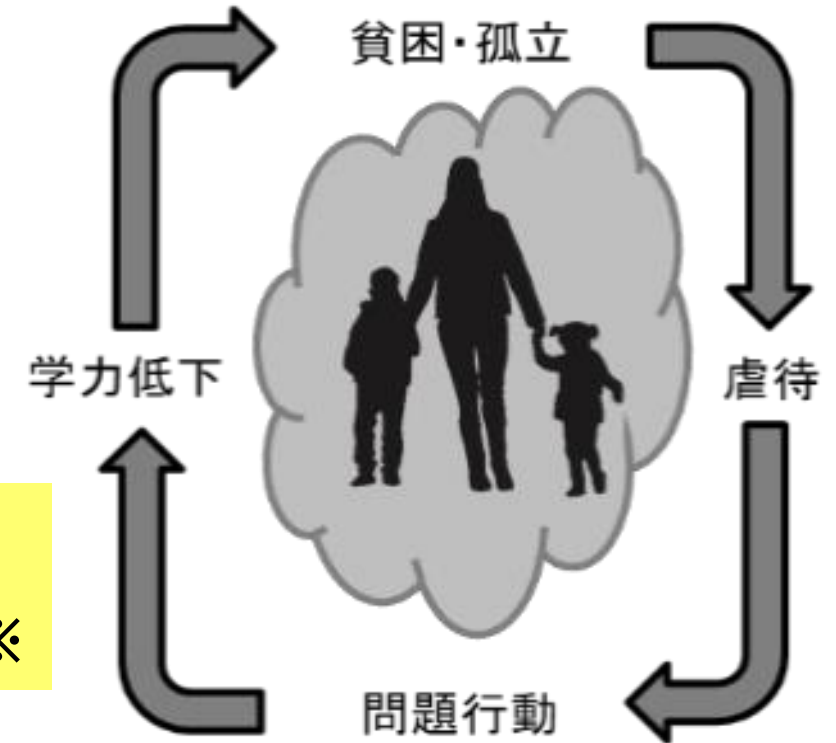
解決すべき社会的孤立・孤独の予防に係る 具体的な問題とその原因

- ① 子どもが声をあげられず 周囲が気づかない
- ② 学校組織が 教師の抱え込み を生む
- ③ 身近な支援が認識されず
必要な子どもに届かない

学校組織に子どもの問題を発見し
支援につなぐ機能する仕組みが必要 = **スクリーニング**※

※**全員の子どもたち**を確認していくことで、**リスク**のある子どもを洗い出し
適切な対応を簡単に行えるようにすること。

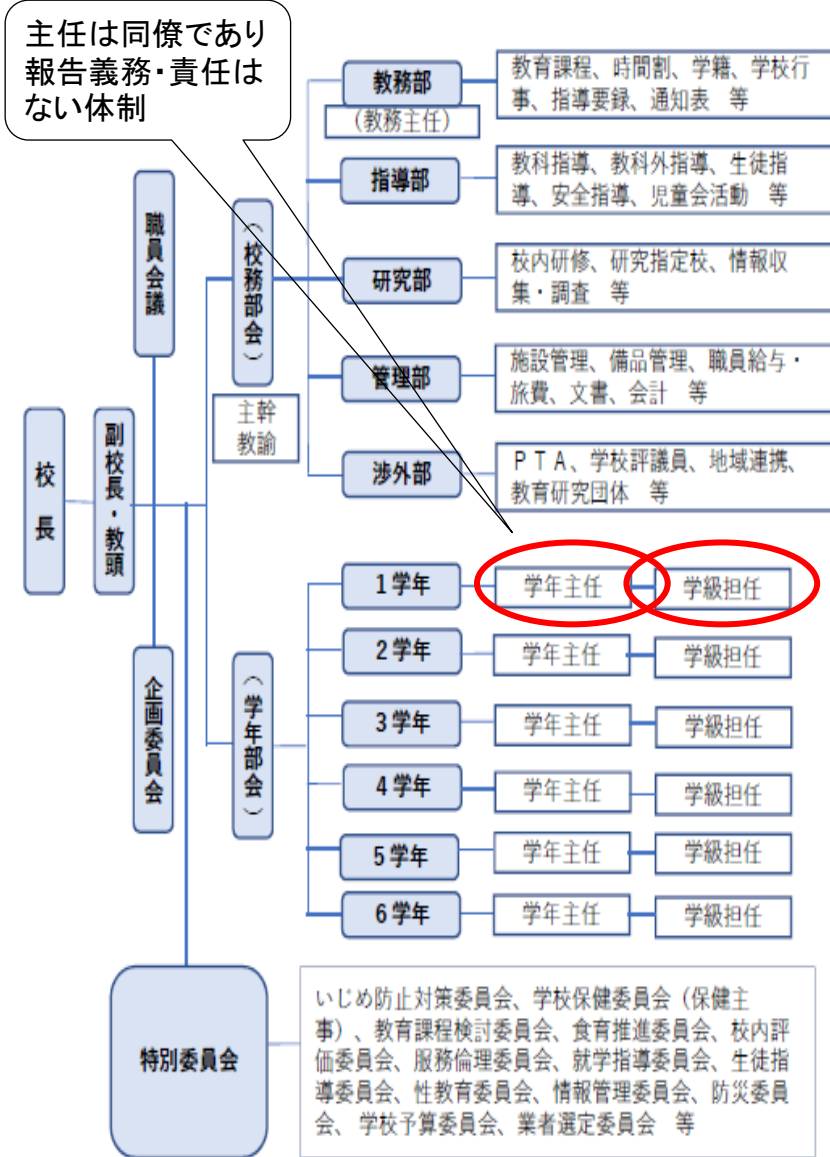
キーワードは「集団を対象」「すばやく実施可能な方法」「無自覚な対象」「暫定的に識別」「早期発見」「簡便であること」



学校の実態

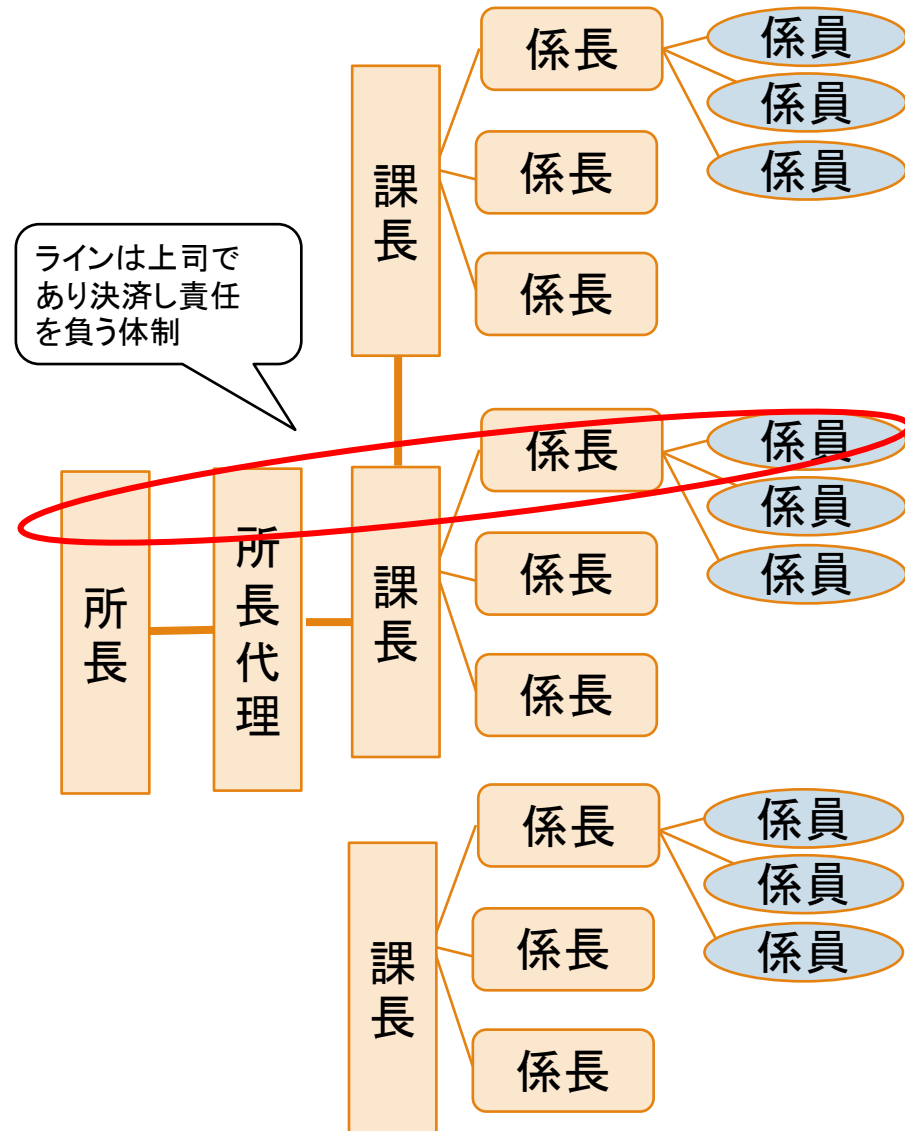
必要な子どもに必要な支援が届いていない。

学校の組織体制（小学校）



担任の抱え込みを把握できない。同僚がゆえに遠慮してSOS言いにくい。伝える場、方針決定する会議が明確にない。

福祉事務所・児童相談所等の組織体系



記録を決済、係員のしんどさを把握、同行訪問等随時、上司から提案できる。家庭の変化をキャッチしたら伝える場がある。チーム体制取りやすい。方針決定する受理・判定会議などあり。

スクリーニングの キーワード

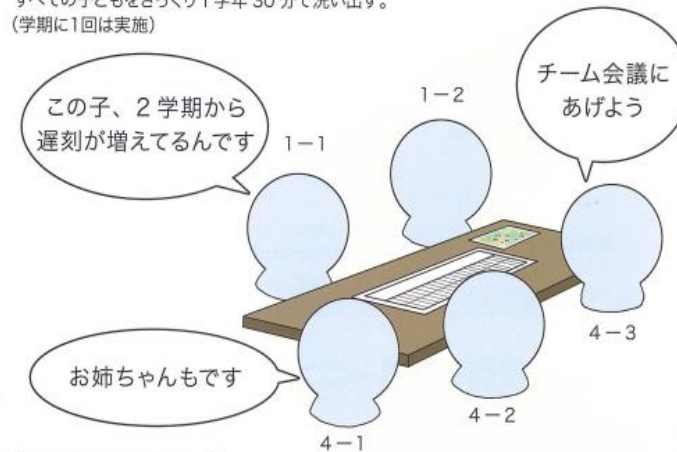
- ・「集団を対象」
- ・「すばやく実施可能な方法」
- ・「無自覚な対象」
- ・「暫定的に識別」
- ・「早期発見」
- ・「簡便であること」

◎アセスメントではない！

◎1クラス15分で行うイメージ=保健所の健診後

学校版スクリーニング ②スクリーニング会議とは

すべての子どもをざっくり1学年 30分で洗い出す。
(学期に1回は実施)



ツール① スクリーニングシート

全児童生徒について、担任・養護教諭・事務職員・管理職などが、
入力ルールに従って数値を入力する。(2=とても気になる、1=気になる)
校内の各所が把握している遅刻や保健室データを一本化。

A screenshot of a spreadsheet used for recording tardiness and health room data for all students. It has multiple columns for student information and various data points.

ツール② 資源マッピング

地域にある社会資源（子ども食堂、スポーツチームなど）を
マッピングした用紙を活用してスクリーニングを行うことで、
教職員にとって地域支援が「使えるもの」というイメージになり、
対応の幅が広がる。



学校版スクリーニングの進め方

必要に応じて福祉版シートの
未就学児のデータから申し送り



スクリーニングの仕組み＝データから自然に繋ぐ



全数から気になる子の
発見へ；チームで
全教員によるスクリーニング

児童生徒理解・早期対応・支援の見える化のための
YOSS(大阪府大山野式スクリーニングシート)
©大阪府立大学山野子研究室

このシートの項目は、統計分析等の学術的研究に基づいて構成されています。印刷の際は、Excel
本シートは、著作権法上の保護を受けております。本シートの一部あるいは全部について、大阪府立
も無断で複製、転載することは禁じられております。

【 年 月 日実施 】(ヶ月分)

1学期

現状

黄は学校独自項目(その他(青い列)に複数項目の追加可)。グレーは入力不要項目 <気になる(週1回程度)→1 特に気になる(週3回以上)>

年	組	氏名	学級										特別支援	発達	健康	経済	管理職・生徒
			①転入	②欠席日数(年30日以上は長期欠席・不登校)	③今年度の7日間以上の欠席(自記入)	④不登校期間あり(自記入)	⑤遅刻・早退	⑥服装・身だしなみ	⑦言葉使い等	⑧本人関係	⑨ケガ	⑩学力	⑪授業中の様子	⑫その他の様子	⑬家庭での様子	⑭家庭との連携	⑮その他の様子
1	1	1															
1	1	2															
1	1	3															
1	1	4															
1	1	5															
1	1	6															
1	1	7															
1	1	8															
1	1	9															
1	1	10															
1	1	11															
1	1	12															

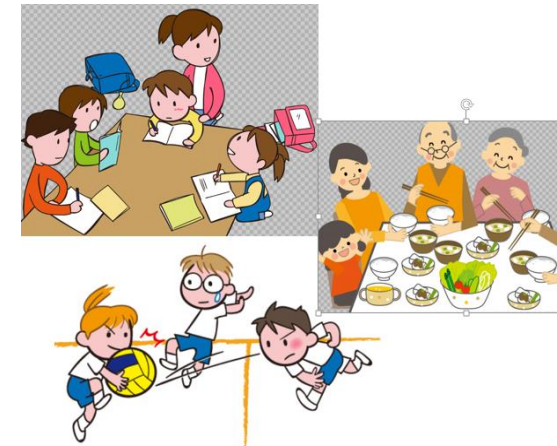
C

B

予防

A

学校と専門機関の**連絡会1**
ケース会議へ



ワンポイントによ
る校内チーム支援

- ①児童相談所など専門機関での支援実行
- ②地域の子ども食堂、学習支援、家庭教育支援等を活用
- ③ポイントを決めた担任見守り

データ蓄積、ITの活用

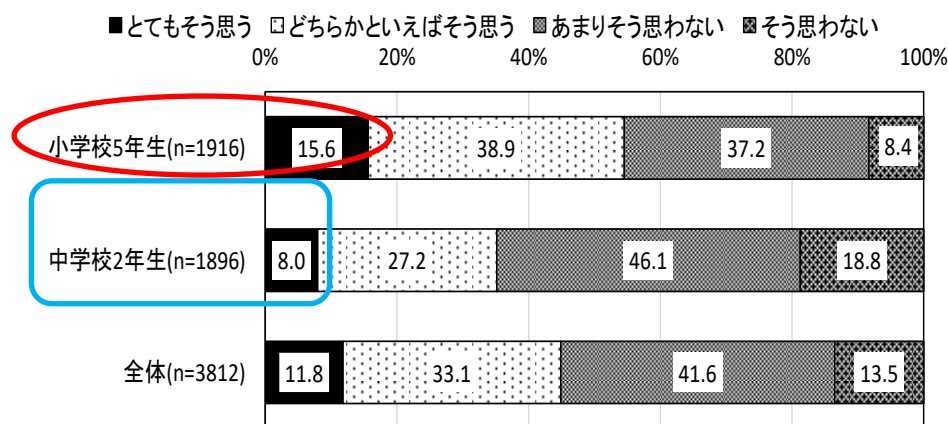
取り組みの評価

地域人材による支援
(自然に繋がる場)

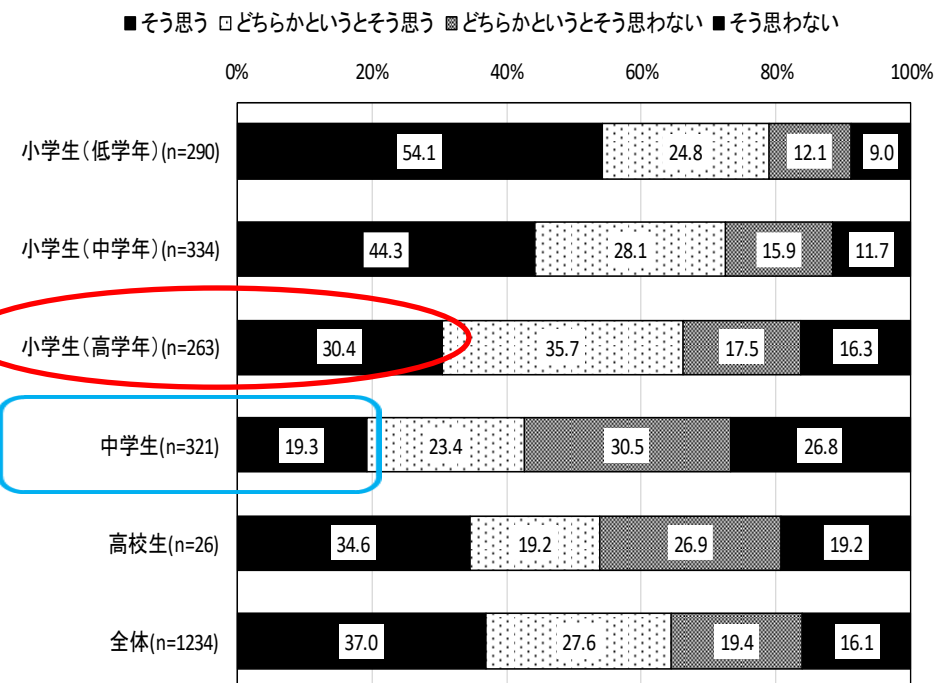
自然とオープン
になる

例) B地域の活用の効果（自己効力感）と意義

◇自分に自信がある（子ども調査）



◇自分に自信がある（居場所調査）



ボランティア的熱さ 身近な支援の頻度

子ども調査と居場所調査を比較すると、いずれの学年も居場所に来ている子どもの方が自己効力感が高い。

※部局を超えたデータ共有の障害とその対策

例)教育委員会で要項を作成

地域の例) 学校→地域

個人情報を提供して地域に紹介する必要はない。

地域から情報があれば地域担当教員がスクリーニング会議で報告する。

家庭訪問による支援の効果 (山野研・沖縄県2018)

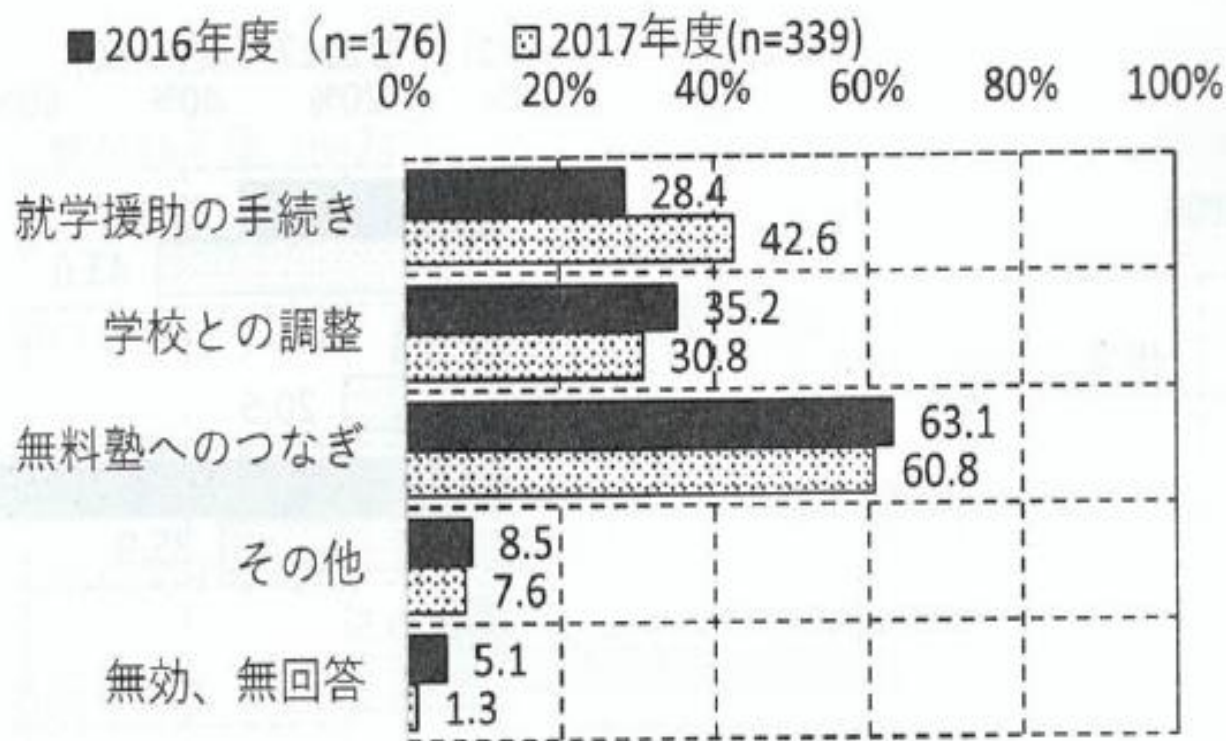
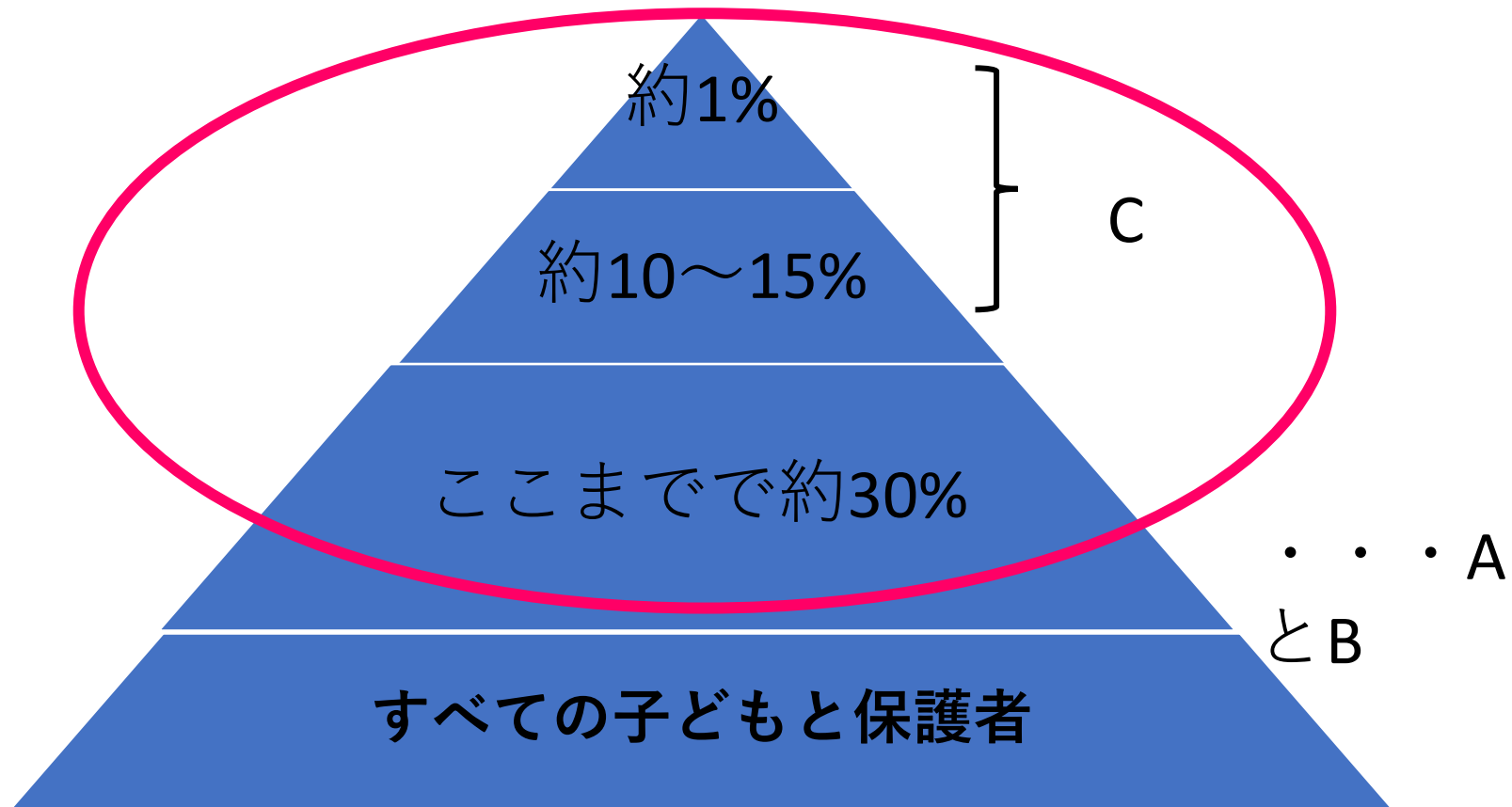


図 197. 2016 年度と 2017 年度の教育支援

いかに身近な支援を活用するか



約1%	児童相談所 部門	保護（専門性）×都道府県圏域
約10～15%	市町村の児童相談所部門	保護・支援×市町村圏域
約30%	市町村の子育て支援部門	予防×市町村圏域
すべての子どもと保護者	地域・学校 部門	育成×校区圏域

スクール
ソーシャルワーク
ハンドブック

Figure 1-1: Hierarchy of Needs Pyramid

The pyramid is divided into four levels, from top to bottom:

- Top level: Self-actualization (自我实现)
- Second level: Esteem (自尊)
- Third level: Love/Belongingness (爱与归属)
- Bottom level: Physiological (生理)

Labels and arrows:

- Left side: A box labeled "Physiological" (生理) points to the bottom layer.
- Right side: A box labeled "Esteem" (自尊) points to the second layer.

「チーム学校」形成の1つの方法

個人の把握：
些細な懸念



組織共有：
些細な対応を明確に決定：
定例化

教師の同僚性：ちょっとした工夫が参考になる！

その機能をもつツールが
“YOSS（ヨース）”



早期対応つながる

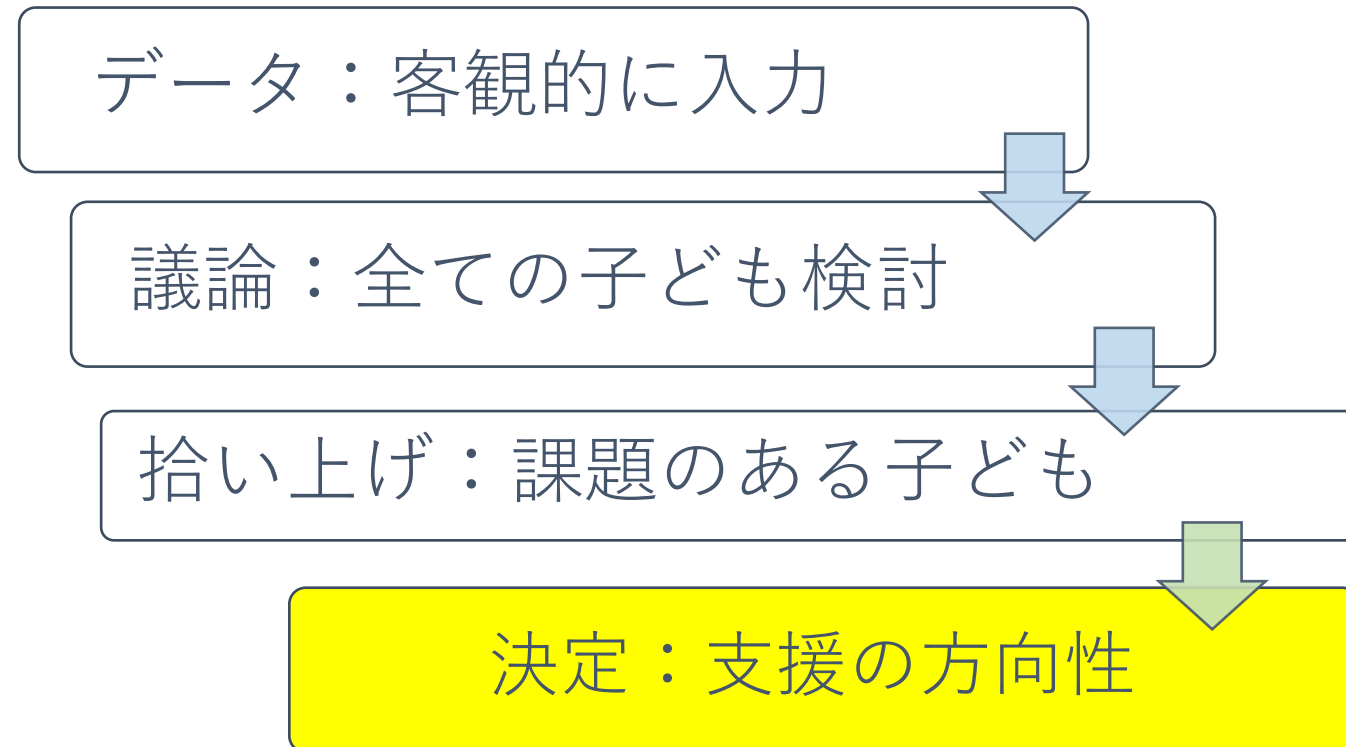
チーム会議に挙げる、ABC方向性を決める：重要＝YOSS®機能



SSWは必須、SSWやSCの機能が明確化される

Y O S S ®によるスクリーニングとは

※関心を持たれた方は山野研究室へご連絡を！無断使用は認められていません。



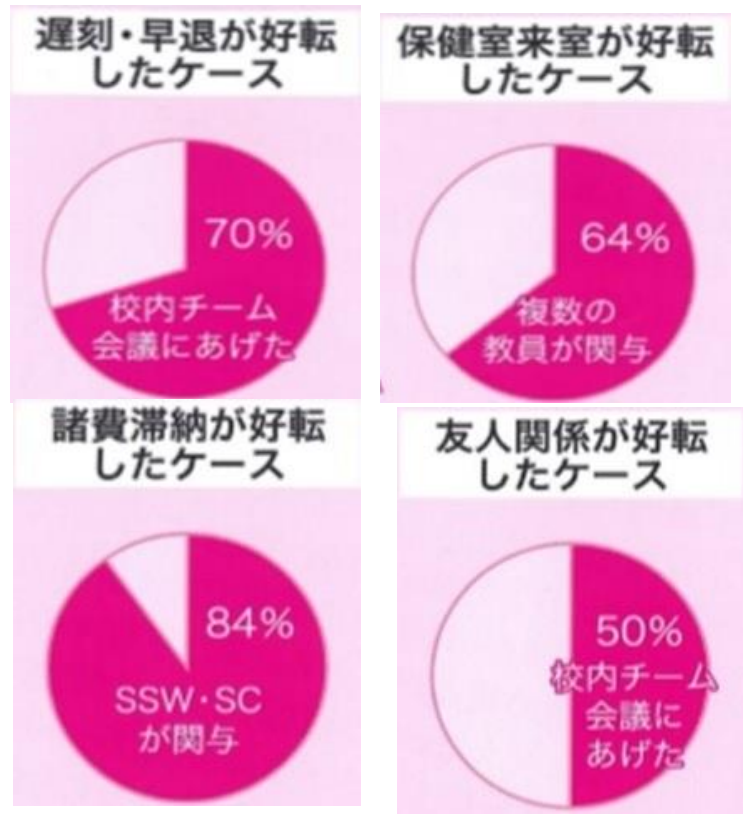
データ＋議論＋決定→チームが進み、教師の抱え込みが軽減するツールである！→さらなる展開へ

取り組みの効果

補足表1. チーム会議にあげた人数の割合

	2018年度	2020年度	
	A自治体 (先進)	B市	C市(一般的)
総数	322	718	621
チーム会議にあげた人数	120	55	3
割合	37.3%	7.7%	0.5%
遅刻・早退の好転率	64.3%	19.0%	

スクリーニングからわかること



A市の例

□ 個々の長欠日数の変化 (関西のある小学校)

	2016年度	2017年度
6年男児	欠席 105 日	欠席 2 日
2年男児	欠席 92 日	欠席 3 日
5年男児	欠席 46 日	欠席 13 日
4年女児	欠席 191 日	欠席 98 日
4年男児	出席 26 日	出席 48 日

□ 連続7日の長欠報告書の数

2016年度…年間92校 (1か月あたり8.36校)

↓

2017年度…年間30校 (1か月あたり2.73校)

長欠児童が激減

スクリーニングを活用した「チーム学校」の取り組みで

関西のある小学校で、1年間に30日以上学校を休む「長期欠席児童」が2016年度の19人から2017年度は10人に減った。連続7日間休んだ場合に作成する「長欠報告書」も、年間92校から30校に減った—こんな「チーム学校」での活動成果が、文科省に伝えられた。大阪府立大学スクール・マネジメントセンター (SCMC) 理事長

2016年度に105日間欠席した小学6年の男児は、2017年度にわずか2日間の欠席だった。同じく92日間欠席した小学2年の男児は、3日に激減した。1年間に20日しか出席できなかった小学4年生の男児は、48日間出席できた。

欠席日数を減らせたのは、教職員、SSW、SCが協力した結果だ。



な議論が展開され、個人では見えなかった子どもの姿への気づきや意見が促されることだ。

たとえば、子どもたちの様子について、次のような会話が出る。

「お母さんにいつもいっところを見せようとするから、学校ではしんどそう」「髪を束ねているかどうかで、母親が不在かどうかを見分けられるなんてすごいな」「具のないそうめんばかり食べているという子、こんな話、こんな場がないと言わなかった」—どれも「生

リスクを 予測

要対協

授業中の様子

服装・身だしなみ

健康（う歯・疾病）

諸費

宿題

友人関係リスク

家庭との連絡

成長

早退・遅刻

服装・身だしなみ

諸費

友人関係

児童虐待リスク

要対協

保健室への来室

健康（う歯・疾病）

服装・身だしなみ

成長

支援学級在籍

経済的課題リスク

教職員の声～スクリーニングを行なって～

- ④ 学年団で一人ずつ見つめ直して、「そういえばこの子こうやったね」と話し合
いができ、一人ひとりがよく見えるようになった。
- ④ ベテラン教員の経験や勘に基づいていた「なんとなく、この子しんどそう」
の視点が、具体的な言葉で見える化した。「可視化」の大切さを改めて感じた。
- ④ 複数の視点が入ることで、学校での目に見える様子から、その向こうにある
目に見えない家庭状況などへの配慮ができるようになってきた。
- ④ スクリーニングシートの項目が一つの指標となり、子どものどんな様子に着目
すべきなのか、若手教員にとっても分かりやすくなった。
- ④ 教員の家庭理解・子ども理解が進み、子どもが通いやすい
学校環境に繋がっている。
- ④ 一覧でわかるので、スクリーニングシートを見ながら
説明することなどができて便利。
- ④ シートが客観的データとして共有され、次につなげて
いくことができる。



<http://www.human.osakafu-u.ac.jp/ssw-opu/>

ここに以下のリーフレットあり

山野則子研究室・能勢町(2019)“スク
リーニング活用ガイド～支援の見える
化・児童生徒理解のために～”

自分では解決できない問題点や子どもの課題を共有し、支援方法などの
アドバイスもいただけたのでよかったです。また他の学年や他の児童を
把握することができ、校内で共有することで自分も気を付けるように
なりました。(20代 初任)

スクリーニングチェックを行うことで
目立たない子どもの特徴や家庭状況、
課題などが浮き出てくるので、一人
ひとりを見ることができてよかった。
(20代 初任)

児童のことをより客観的に分析すること
ができ、内容項目を確認することで
「児童の見方」が分かった。
(20代 担任経験5年)

担任が気づいていなかった現状が、
他の先生の質問によっておもてに出てくるのが
よいところだと思う。(30代 担任経験10年)

前回と数値で比較することで、
子どもの変化を客観的に
つかむことができてよかった。
(40代 担任経験15年)

本市のめざす、学校プラットフォーム化とは「地域に開かれた教育課程」や
「地域とともにある学校づくり」である。スクリーニングはその実現のための
必須アイテムでもあると考える。(管理職)

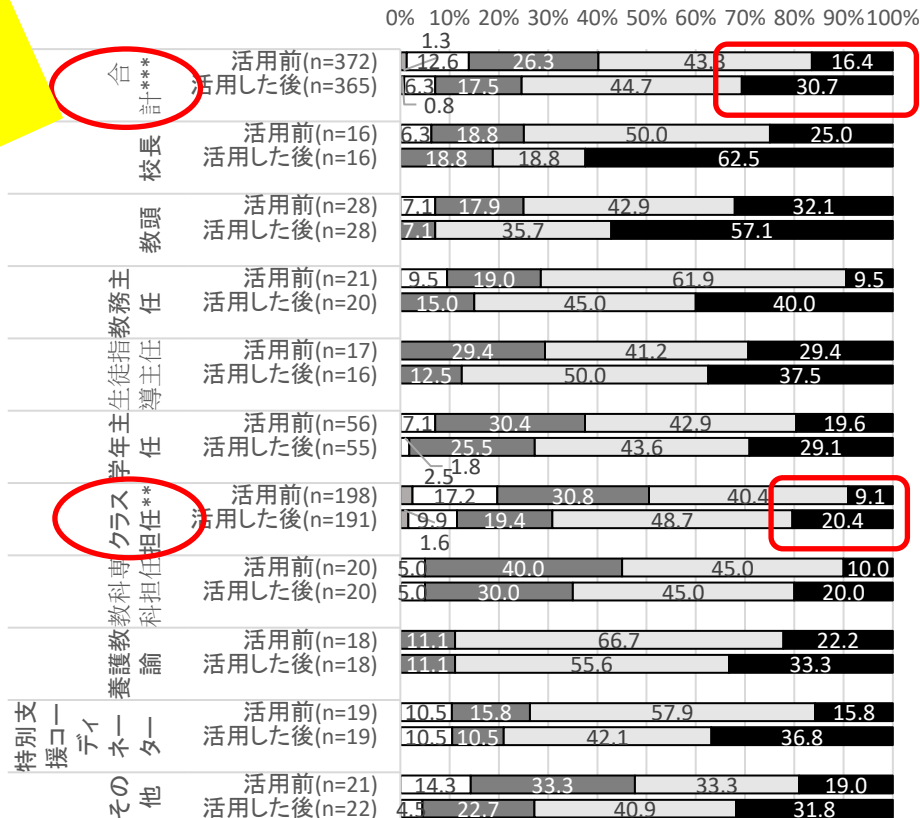
・ 山野則子研究室・橋本市
(2020)“スクリーニングスター
トマニュアル”



スクリーニング会議による議論UP、決定力UP

◇職種別に見た、会議の場で、自分が受け持つ担任以外の児童生徒について意見をいう程度

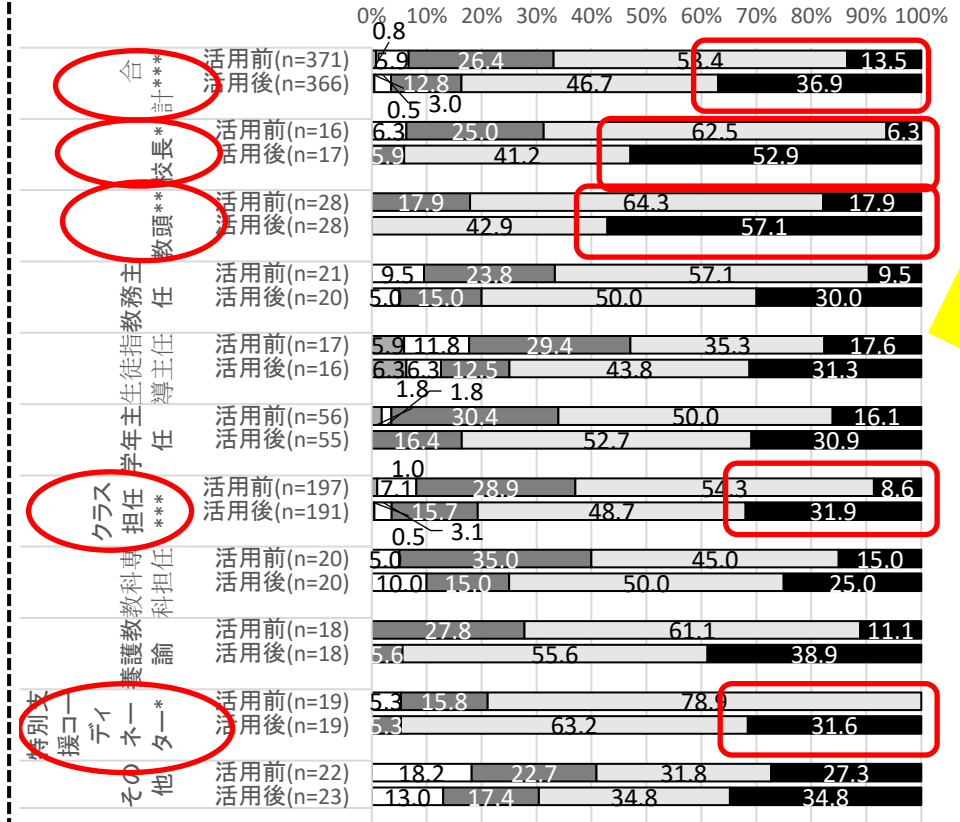
問3-①. 会議の場で、自分が受け持つ担任以外の児童生徒について意見をいう



■ 全くあてはまらない[1点] □ あまりあてはまらない[2点] ■ どちらでもない [3点]
□ まあまああてはまる[4点] ■ おおいにあてはまる[5点]

◇職種別に見た、会議において児童への対応について具体的に決定する程度

問3-④. 会議において児童への対応について具体的に決定する



■ 全くあてはまらない[1点] □ あまりあてはまらない[2点] ■ どちらでもない [3点]
□ まあまああてはまる[4点] ■ おおいにあてはまる[5点]

- 全体では、YOSS活用前と比べ、活用後の方が、より児童生徒について意見を言ったり、児童への対応について具体的に決定したりするようになった。

チーム力
UP

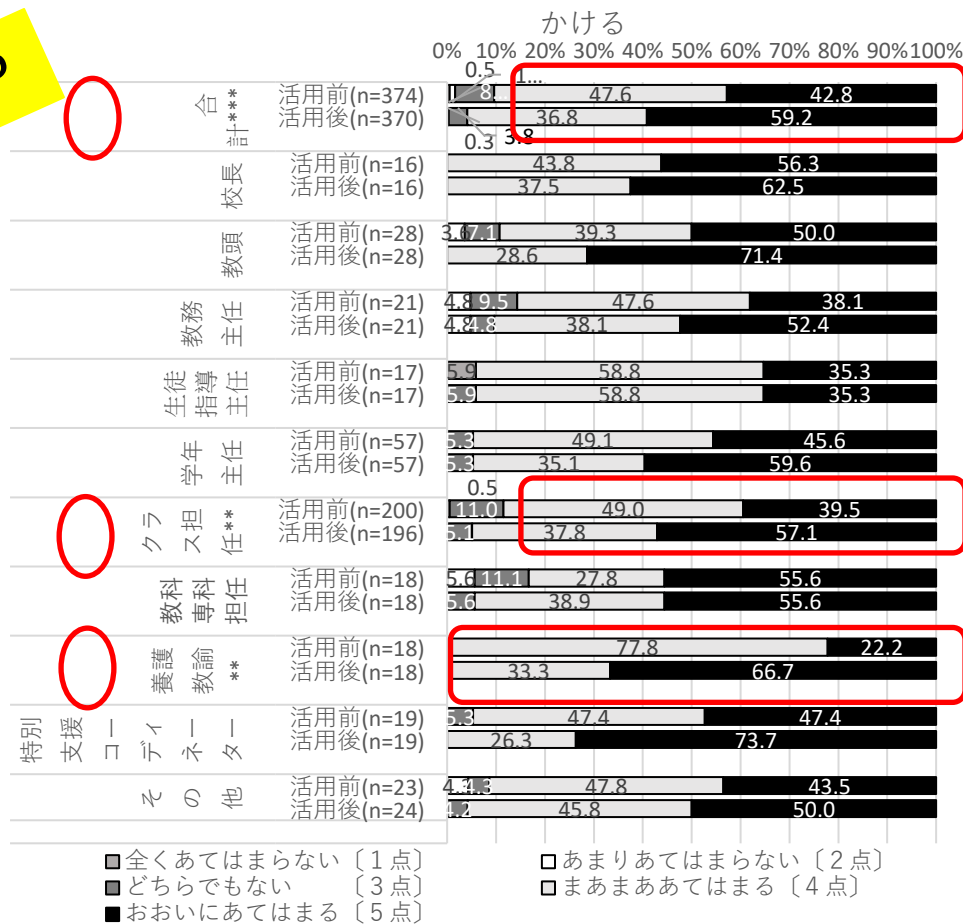
決定力UP

子どもの発見力UP！

スクリーニングによって教師の負担感が増加しない！

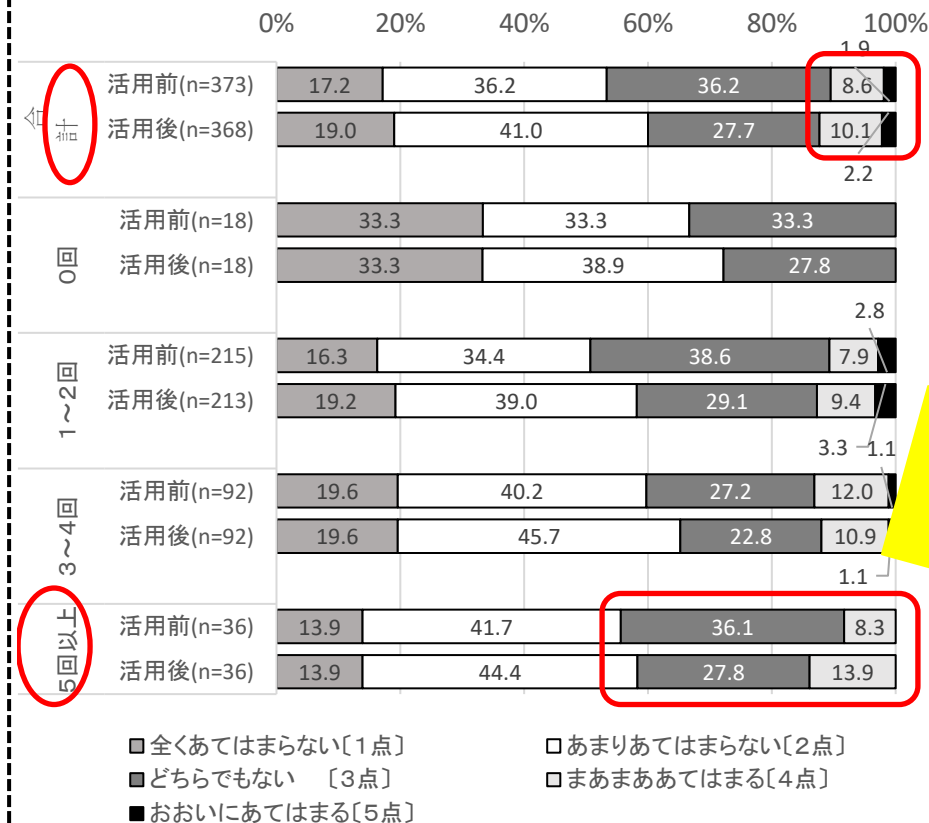
◇職種別に見た、複雑な家族構成の中で暮らしている児童を気にかける程度

問2-③. 複雑な家族構成の中で暮らしている児童を気に



◇スクリーニングチェック実施回数別に見た、チームで決定することは負担である程度

問5-⑤. チームで決定することは負担である

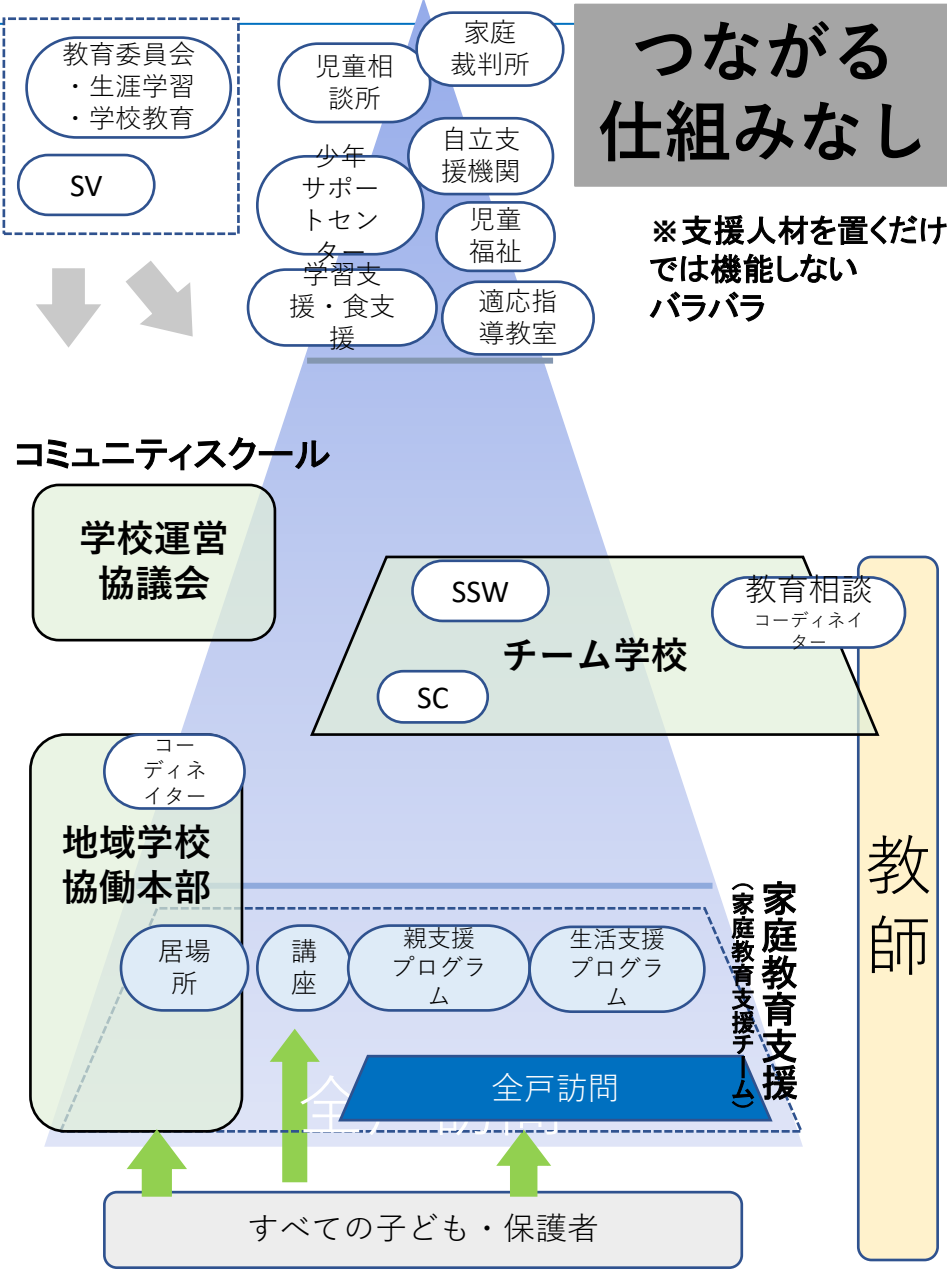


負担感の増加なし

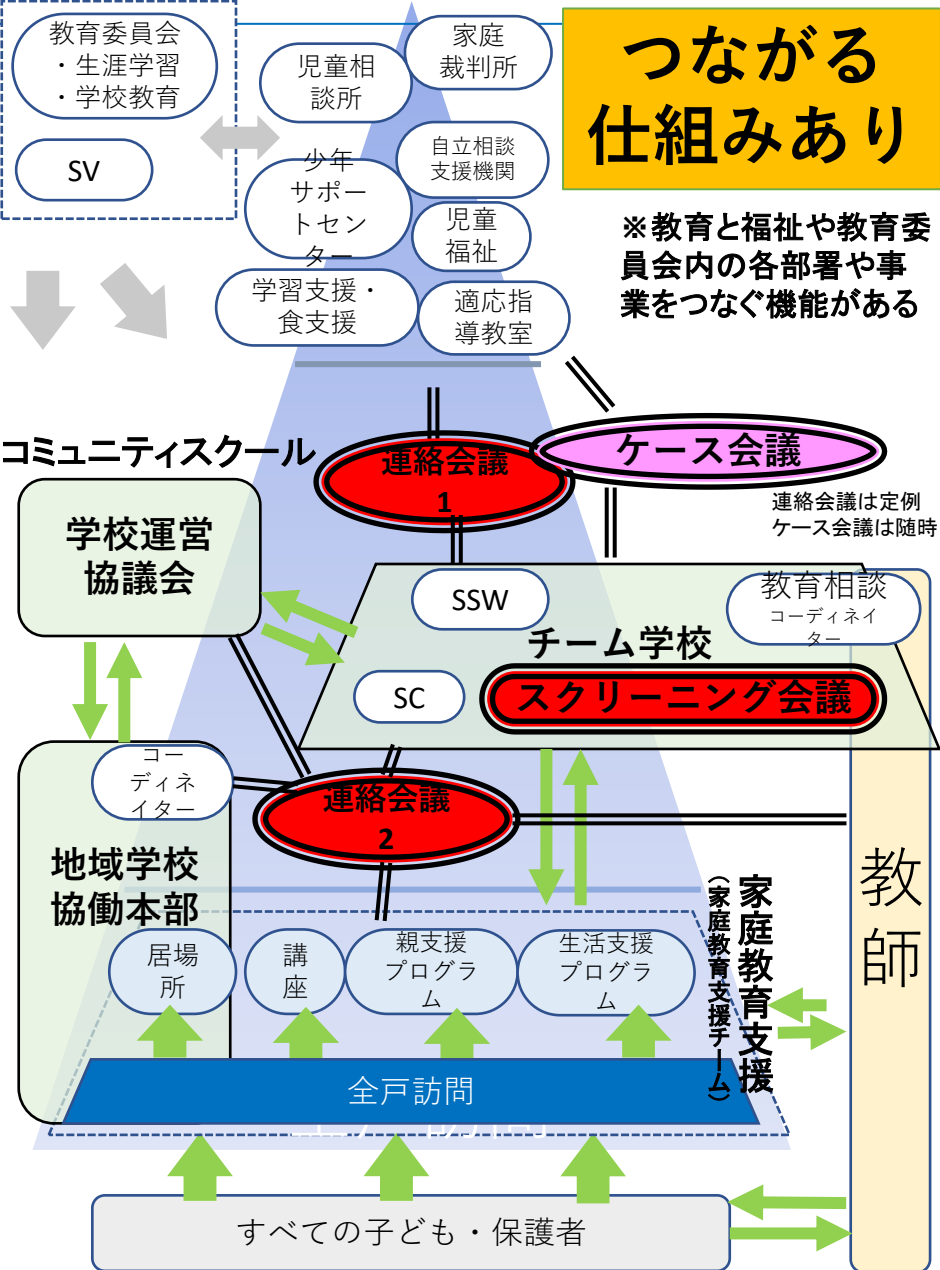
- スクリーニングによって家庭背景を見るようになり、回数に関わらず、YOSSの活用によって複数で集まって議論し決定することに教員の負担は増えたとは言えない。

学校・家庭・地域をつなぐ仕組み作りとその制度化（2017年文科省スクリーニングの提示）

※背景の▲はすべての子供から上に行くほどリスクの高い層を表す



文科省「児童生徒の教育相談の充実について」P28に掲載



このPJで展開:スクリーニングの社会実装

研究活動・自治体からの委託

国からの受託・委員

国へのアクションと結果

2018

2019

2020

2021

③スクリーニングYOSSの開発

<受託研究>

・能勢町子どもの貧困対策強化促進事業

<科研>

・子どもの課題発見から支援までのスクリーニングの開発

・20自治体・学校が府大と契約を結び実証実験中

スクリーニングYOSSの効果

社会課題:コロナによる影響への政策
=スクリーニングYOSSへの期待

・AIモデル作成、検討中

<委員>

・厚生労働省 社会保障審議会児童部会委員

<委員>

・文部科学省 不登校に関する調査研究協力者会議ワーキングチーム

<委員>

・文部科学省「学びを通じたステップアップ支援促進事業」審査委員会
・厚生労働省「子ども・子育て支援推進調査研究事業」企画評価委員会
・厚生労働省「厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業」評価委員

<文部科学省受託研究>

・スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーの常勤化に向けた調査研究

<内閣府委託>

・沖縄子供の貧困緊急対策事業分析・評価・普及事業(2017~)

<厚生労働省特別研究>

・コロナ禍における子どもへの影響と支援方策のための横断的研究

<委員>

・内閣府「貧困状態の子供の支援のための教育・福祉等データベースの構築等に向けた研究会」座長

国会厚生労働委員会:野田市事件からYOSSスクリーニングを答弁に活用(2019.5)

文科省:学校・教育委員会等向け虐待対応の手引きにスクリーニング掲載(2019.5)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1416474.htm

文科省:スクリーニング含む報告書作成

文科省:スクリーニングガイド作成依頼
文科省HPにアップ(山野研作成)

文科省:スクリーニングを推奨する通知文が出される(2020.3&5)

山野:参議院議員骨太の方針の勉強会に招聘(2020.3)

NHKで取り上げられる

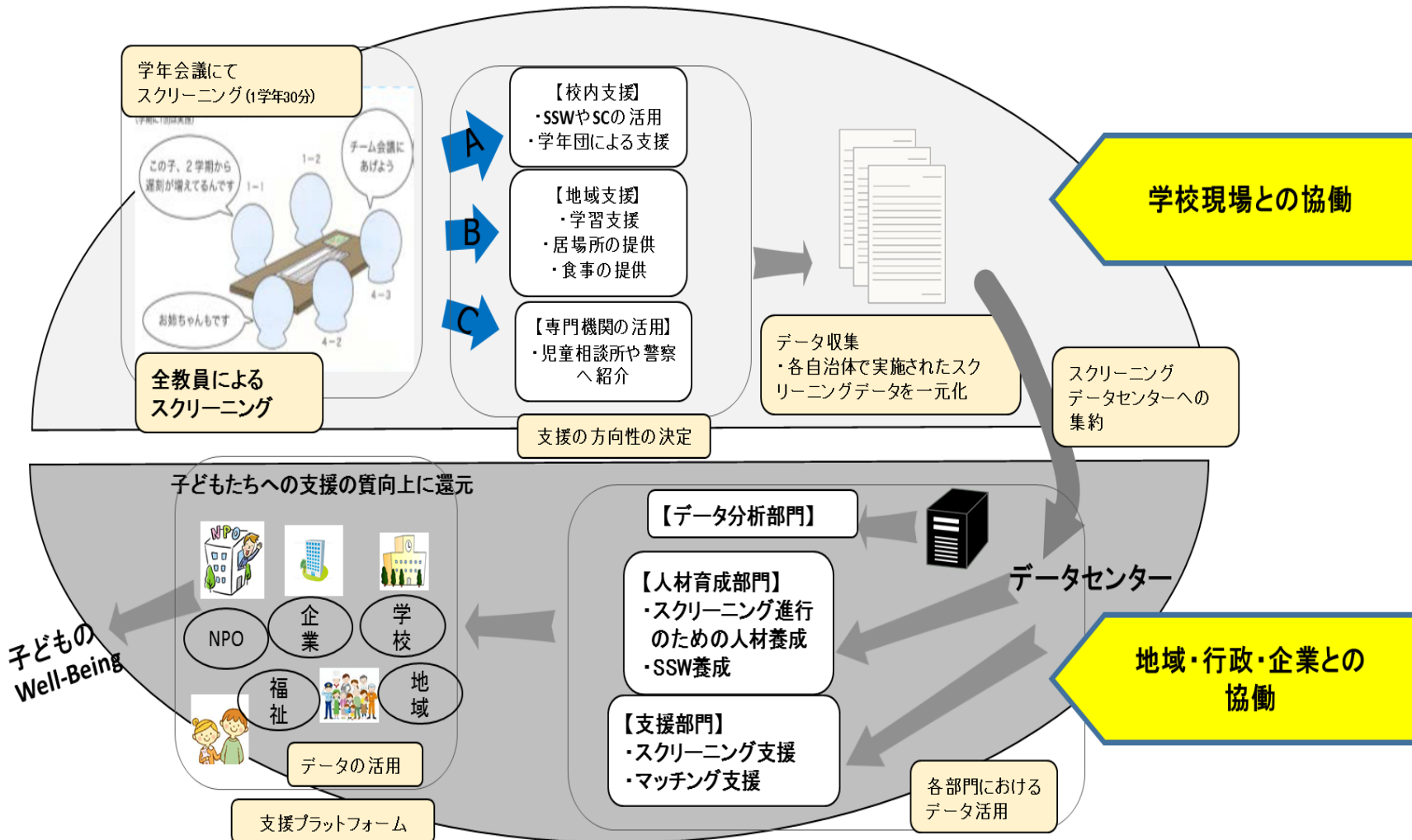


文科省:スクリーニングを実証実験として全国に公募
→国が実証実験開始(YOSS利用)

内閣府:今年度まとめて来年度モデル実施へ(予定)

AI技術を用いたスクリーニングシステムの実現可能性

多様な関係者が協働する研究体制



- AI開発や情報セキュリティを専門とする研究者との**協働体制**

=これまでのプロジェクトにおいて**構築済み**

- スクリーニング研究に関してもすでに**複数の自治体 (20)**と契約を結びデータ提供を受けている。
- スクリーニングの**モデル校**として始めている自治体において、すでにエクセルのスクリーニングの**試行**を学校や自治体と話し合いながら進めている。AIシステム活用へ移行しつつある。

→新たに**AIスクリーニングYOSS**を実施する基盤は形成されている

→課題も明らかとなり、**社会システムの開発が必須**

文科省がスクリーニングを提示→内閣府、政府へ

- 2017年「児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～（文科省）」にスクリーニングが掲載されている。
- 2019年度 文科省はよりスクリーニングを取り上げ推進する。以下の案内を全国教育委員会に発信された。作成：山野研究室https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302910.htm
このなかの下の方の
 - 「スクリーニングによる児童虐待、いじめ、経済的問題の早期発見」
 - スクリーニング活用ガイド（概要版）（PDF:1.13MB）
 - スクリーニング活用ガイド（PDF:637KB）
- **2021年度：文科省がモデル自治体に予算化。YOSS活用して実施。**
- **2021年度：貧困状態の子供の支援のための教育・福祉等データベースの構築等に向けた研究会座長**
- **2021年12月デジタル庁：「デジタル社会に向けた重点計画」実証実験予定**
- **2021年12月内閣府「孤立孤独対策に孤独・孤立対策の重点計画」**

2021年度、20自治体と契約、協働実証中（AIスクリーニングシステムYOSSを試行）

支援が身近でないと届かない

- ・小学生は大人同伴でないと校区外に出てはいけない規則がある
- ・昼間親の不在の家庭や子どもへの意識が高くないと連れていけない。
- ・NPOや地域は個人情報があって必要な子どもがわからない。
- ・福祉制度は申請主義で手続きが難しい、行かなければならない。
- ・支援の必要な家庭は子どもどころではい、必要な家庭ほど家に帰ってしまうと支援にますます届かなくなる。

相談の看板というより気軽に話せる場、をどう作るか
＝アウトリーチ、アドボケイトのスキル



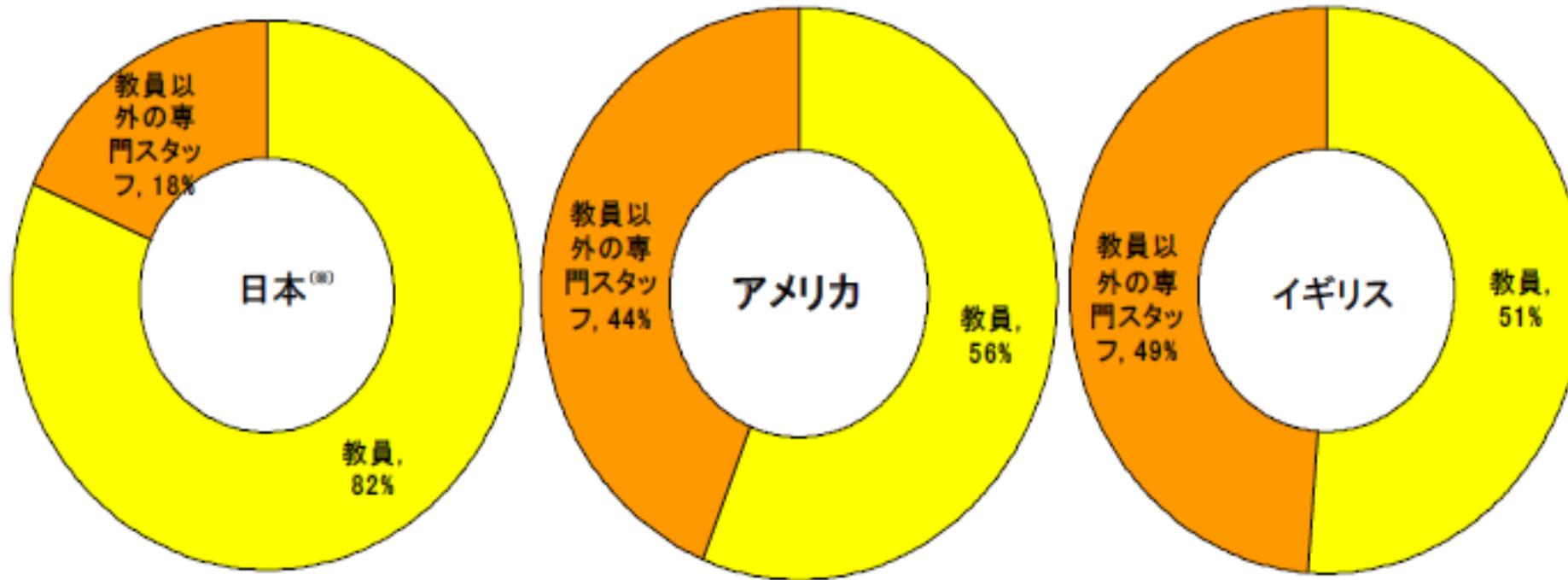
地域福祉
の重要性

学校プラットフォーム：取り組みが見えない→可視化→届ける



専門スタッフの割合の国際比較

○初等中等教育学校の教職員総数に占める教員以外の専門スタッフの割合



出典: 文部科学省「学校基本調査報告書」(平成25年度)、“Digest of Education Statistics 2012”、“School Workforce in England November 2013”

※1 日本は小・中学校に関するデータ

※2 日本における専門スタッフとは、養護教諭、養護助教諭、栄養教諭、事務職員、学校栄養職員、学校図書館事務員、養護職員、学校給食調理従事員、用務員、警備員等を指す

※3 アメリカにおける専門スタッフとは、ソーシャルワーカー、医療言語聴覚士、就職支援員等を指す

※4 イギリスにおける専門スタッフとは、司書、メンター、医療及び養護職員等を指す

メゾレベル

<学校で行う子ども食堂>

SSW、CSWの働きかけ→自治会主催
+ 学校（教師） +
関係機関（家児相、
法人、包括支援センター） + 医療機関（歯科医）



3. 地域の活用



+ 企業 + 医療機関（歯科医）

遅刻が0に！ 親の意識変化！

- ・ 企業の寄付：歯ブラシ、簡易水道創設
 - ・ 歯医者：歯磨き後のチェック、そして教室へ
 - ・ **PTA：ランドセルかけづくり、朝食づくり参加**
- へ

「つなぎひと」とは



ひとりぼっちの子どもたち 今、社会変革の時

日本の社会を、大きく変えようとしている「うねり」がある。この国の子どもたちの悲鳴が、その背景に横たわっている。うねりは、学校を拠点にした変革の波だ。その基盤の1つに振えられるのが、SSW（スクールソーシャルワーカー）の存在である。

□ マイルストーン

昨年（2017年）3月、2008年に国がSSWを事業化してから10年の節目の年に、新たなマイルストーン（里程碑）になる動きがあった。学校教育法の施行規則が一部改正されて、SSWがSC（スクールカウンセラー）とともに、初めて「学校職員」として明記されたのだ。社会変革の道しるべが、ようやく見えた、そう思った。

□ 「今」「目の前」「大切」

一方で、苦しむ子どもたちを目の当たりにして、国の動きを憂う間もなく、絶望な思いから走り出している人々もいる。目の前の子どもたちは、「今」が大切だからだ。NPOやNGO、一般社団法人やボランティアのみなさん。実に多様な人々が、「子どもの最善の利益」のために駆け回っている。

□ 国のカード

とはいえ、国も動いて、たくさん
のカードを用意してきた。2014年の
「子ども食堂」の設置が義務づけられ、

小学校等中、同じく2015年の「地域
学校協働本部」や「コミュニティ・
スクール」の概念を打ち出した中教審
答申。そして同じ2015年の内閣府子
どもの貧困対策会議の「学校プラ
ットホーム」にふれた決定などだ。

こうした動きが、昨年3月の学校
教育法施行規則の一部改正につなが
った。

□ ジグソーパズル

国が切り出したカードを、整理し
よう。子どもの貧困カード、チーム学
校のカード、地域学校協働のカード、
コミュニティ・スクールのカード、学
校プラットホームのカード……。そして、
子ども食堂のような民間のカードも複
数ある。

注目されるのは、どのカードにも、
SSWが登場することだ。「つなぎひと」
として、中心的存在を担っている。

国の新しい動きを「よいしょ、よい
しょ」とけん引してきた1人が、大阪
府立大学スクール
ソーシャルワーク
評価支援研究所の
所長、山野潤子教
授（SWM）だ。その
「SSWの旗手」が、
言った。

「カードがバラバラ。ジグソーパズ
ルのピースのようなもの。ピースを理
めて一枚の絵ができた。学校プラ
ットホームがわかる。その中核となる
べき専門職はソーシャルワーク。そ
から、すべての子どもたちが輝く、



「シングルファーザー」の 想いを繋ぐ(10面11面)

全国で講演する清水健さん。3歳の息子の
シングルファーザーとしても活動中だ

⑨ グッドプラクティス

一山野さんが全国を駆けまわって学校
プラットホームの普及やSSWの定着化を訴
えたと、きまって「グッドプラクティス
を見せてくれ」と言われるそうすね
「毎年のようにいますよ。グッドプラ
クティスを見せてくれ」と笑う。だから、
あちこちの自治体にかかわって、学校
プラットホームの実現に向けた「優れた事
例」づくりを進めています」

ルポ さかい子ども食堂門下会

ぐんと冷え込んでいた。昨年11月22
日のあさ、堺市総合福祉会館5階の大
研修室に約50人が集まってきた。昨年
6月に続く、第2回目のさかい子ども食
堂門下会がはじまるのだ。主催は、堺市
と堺市社会福祉協議会。子ども食堂を運
営する人だけでなく、子どもを想うい
ろんな仕事の人々が足を運んだ。

この日のテーマは、「さかい子ども食
堂 plus ワン 食の提供以外の子ども食
堂の役割は？」だった。



門下会議のアドバイザーは、山野潤子さん。

微笑みながら、淡いレモン色の
セーターを着て現れた（写真上）。

今、堺市の門下会議は、全国の注目を
集めている。門下会議の目的は、次
のように書かれている。

＜分野を横断し、各関係機関が力を合
わね、子ども食堂の立ち上げから運営に
至るまでの課題共有の場とする。地域の
方々や民間機関が主体的に活動できる環
境づくりを検討する。堺市の子どもの食



笑顔、笑顔、笑顔（門下会議）



SSWの久山麻子さん。毎週木曜日には堺市立小学校で活動している



登校前、教室に集まった子どもたち。「いただきます」



「つうふ」代表の藤田啓司さん



料理に裏をみるう近所の主婦や民生委員



ボランティアの高校生さんにも「アーン」



生命保険協会の寄付金によって、SSW評価
支援に関する取り組みを社会に広める情
報紙を元新聞記者の編集の元、ともに作
成し、発行している。

背景に・・・

自治体として必要なこと

マクロ：自治体全域で共有する場を作る

(山野2018：近刊)

市が主催して各方面から集まり、どのようなあり方がいいのか意見交換、そこから校区で設立、相互支援が発生する（福祉と教育、医療、企業の連携の仕組み作り）

全体（連絡会1）：「さかい子ども食堂円卓会議」アドバイザー参加

子ども政策、社協、生保、家児相、教育委員会、自治会、地域包括、SSW、NPO、企業、医者、生協、院生



個別：校区（連絡会2）：校内の子ども食堂＋企業＋医師→実習や学生ボランティアで参画



都道府県と市町村の連絡会、 市町村全体と校区あるいは取り組み部門の連絡会

→二層構造を策定する、現場丸投げは機能しない！

1) 自治体版 (① = A+B+C、② = A+C、③ = B+C、④ = C+D)

A.都道府県：学校教育×家庭教育支援×児童福祉×（生活保護）×保健の共有の場（≡連絡会1；行政中心の全体会）

B.区市町村：学校教育×家庭教育支援×児童福祉×生活保護×保健の共有の場（≡連絡会1；行政中心の全体会）

C.社会福祉協議会×地域（NPO、自治会など）×企業×子育て支援×（保健医療×児童福祉×生活保護）の共有の場（≡連絡会2；地域中心の全体会）

C.全戸訪問の家庭教育支援の担当課×学校教育（≡連絡会2）

2) 学校版や各地域版 D = 個別取り組みに参画する多様な職種の会 →市町村は上記全体会とこの個別地域でのDができる仕組みを試行

・学校のなかで子ども食堂＝地域×学校×SSW×福祉×企業×医師（≡連絡会2；地域中心の個別会）

・家庭教育支援チーム×学校（≡連絡会2；地域中心の個別会）

・コミュニティスクール×学校（≡連絡会2；地域中心の個別会）

・学習支援や居場所×SSW（≡連絡会2；地域中心の個別会）

※連絡会1は専門機関と学校、連絡会2は地域人材と学校や各地域の会で必ずしも会議体でなくとも集まる場、共有する場の意味（つながる仕組み図）

取り組みや支援の全体像の可視化、家庭、学校、地域が相互補完

《役所や学校》

着眼 1：全体像を作る

= 学校プラットフォーム

(地域とつながる→家庭教育支援含む)

着眼 2：学校でできること = チーム学校

スクリーニング⇔地域 つなぐ仕組みを作る

《地域》

指導型でなく、当事性が高いこと重要

誰もが自然に当たり前に身近な交流、支援の選択や享受が可能になる社会を創る必要がある！

→地域の成長が必須、それを作る人材（CSW）が必須！

＜地域と学校の連携例＞
コミュニティスクールの例
玄関がWellcome！
各教室に2人のCSスタッフ



イギリスのExtended Services

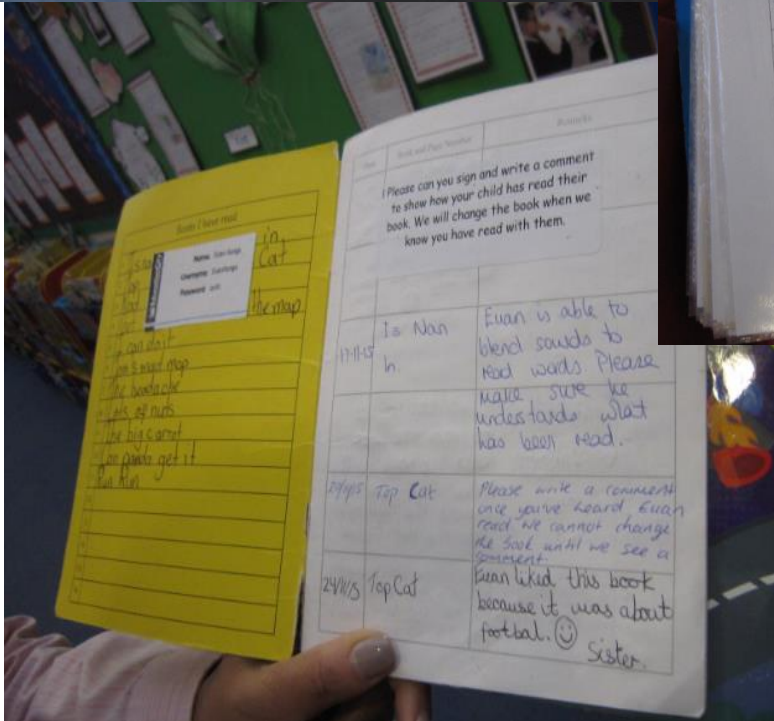
- 早期教育の導入、格差是正、TAの徹底
- 学校のなかでの朝食サービス
- 学校という場で、あるいはチャイルドケアセンターと共同して、母親への就労支援：母親自身への教育と、その子どもへの教育のため
- ナーサリースクールが校内に存在
- 学童保育の充実
- 例：訪問した小学校の場合

72人の職員のうち、教員は22人

(残りは教員以外の専門スタッフ (TA、メンター、司書など))

※イギリスがこのような支援を実施できる背景には、充実した教育への投資がある





Reading Level					
Initials	Date	Book Title	Comments	Reading record	
VN	1/10	Tom's Mac Map	Discussed pictures		
VN	21/10	Tom's Mac	Disc. to sound and		
VN	21/10	Eleven Flans	Disc. to sound		
VN	11/1	East Cow Street	Discussed what happened		
VN	21/1	Seaside Cat	Discussed what happened		
VN	25/2	Ducks	Discussed what happened		
VN	25/2	Big Feet	Discussed pictures		
VN	1/3	My Cat	Well sorted out - maybe who		
VN	3/3	My Cat	Well sorted out - maybe who		
VN	3/3	My Cat	Well sorted out - maybe who		
VN	3/3	My Cat	Well sorted out - maybe who		



子どもの貧困

不登校

非行

教師の多忙化

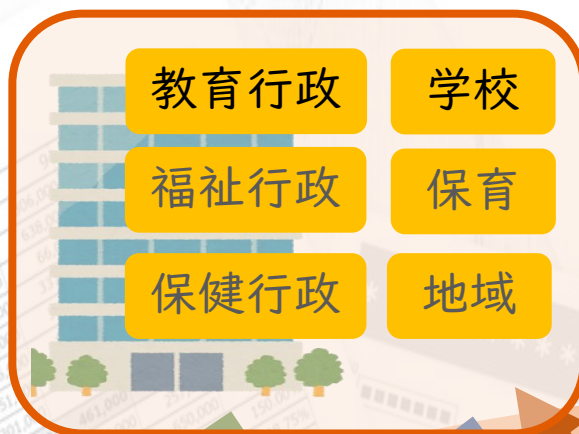
児童虐待

いじめ

SSWの人材不足

—実績—

- ・文科省スクリーニング活用ガイド
- ・子どもの貧困対策大綱改訂
- ・沖縄子供の貧困対策



自治体

SSW評価支援研究所

チーム学校

政策提案
社会実装

学校プラット
フォーム

国

知財・契約
研究推進課

委託

支援

支援

スクリーニング
プログラム

エビデンスに
基づくSSW
プログラム

子どもの
貧困調査

全国ネット

コロナによる
影響調査

企業・NPO

研究者

ソーシャルワーク
教育学校連盟

＜すべての子どもを取りこぼさない仕組み構築～今までの研究からの位置づけ～＞

スクリーニングシステム(AI)構築研究 ＝子どもの最善の利益ベイスト

子どもの
貧困実態

コロナの
影響実態

エビデンスに基づく
SSW事業構築研究※

SSW
の実態

子ども虐待防止ネット
ワーク構築研究

乳幼児
子育て実態

虐待
実態

機関連携
実態

民生委員
の実態

児童相談所
の実態

学校
の実態

実態調査研究

これらの内容の参考になる本



- なぜ学校なのか
- 教育と福祉の協働
- なぜスクリーニングなのか
- 地域を活用

全数近いデータから
子どもの実態に迫る！



「データが示す子どもたちの実態は切実であった」

本書の目的は、単なる貧困の実態を表すのではなく、調査の意義や方法といった設計部分から地方自治体と研究者の協働、さらには施策の策定・実施・改善まで、データに基づく議論の展開を提示することにある。つまり、調査が実態と施策の架け橋となることを期待している。（本文より）

学校版スクリーニングシステム

YOSS活用事例報告会

— 「チーム学校」を実現するために —

2022年9月25日(日)

13:30-16:30

(受付開始13:00)

お申込先：大阪公立大学現代システム科学研究科 山野則子研究室

gr-kyik-ebssw@omu.ac.jp (担当：木下)

※お名前・ご所属・スクリーニング活用有無を明記してください。申込締切：9月9日



◆ スクリーニングの意義 山野則子

- ・ 子どもの課題と学校の現状から子どもを思う教師やSSWにとってなぜスクリーニングなのか。今後の展開予定について。

◆ 子ども家庭庁（準備室）より報告

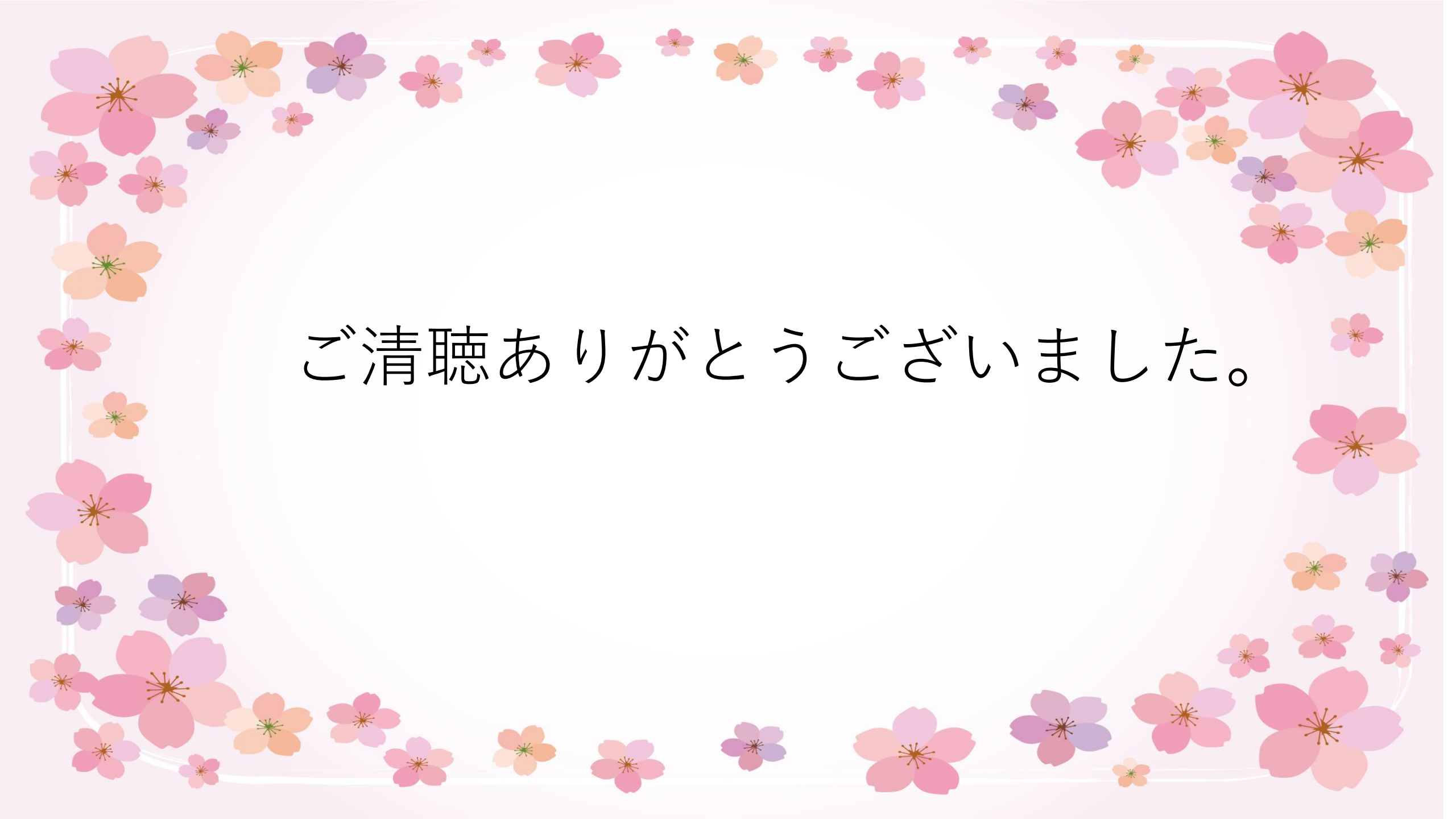
- ・ 国の動き（デジタル関連含め）

◆ 取組事例報告（自治体名予定）

- ① 沖縄県糸満市（実施校の立場から）
 - ② 岡山県奈義町（教育委員会の立場から）
- ※先進地からのコメント

◆ グループワーク

- ・ どうやって進めるの？教師やSSWの役割は？

A decorative border of stylized cherry blossoms in shades of pink, orange, and purple, arranged in a rectangular frame around the central text.

ご清聴ありがとうございました。

<参考・引用文献①>

- ・ 安部計彦（2011）「要保護児童対策地域協議会のネグレクト家庭への支援を中心とした機能強化に関する研究」こども未来財団
- ・ 原田正文・山野則子ほか（2004）「児童虐待発生要因の構造分析と地域における効果的予防法の開発」平成15年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究所保護事業）報告書.
- ・ 法務総合研究所（2001）「『児童虐待に関する研究会』のまとめ（第1報告）」『法務総合研究所研究部報告』
- ・ 川松亮（2018）『全国児童相談所長会平成29・30年度調査「児童相談所業務の推進に資するための相談体制のあり方に関する調査」中間報告』
<https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000394624.pdf>
- ・ 厚生労働省（2015）『子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について（第11次報告）の概要』
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000099958.pdf>
- ・ 厚生労働省（2018a）『平成30年度福祉行政報告例：児童相談所における受付件数、年齢×相談の種類別』
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450046&tstat=000001034573&cycle=8&tclass1=000001136626&tclass2=000001136634&stat_infid=000031907850&tclass3val=0
- ・ 厚生労働省（2018b）『平成30年度福祉行政報告例：児童相談所における対応件数及び未対応件数，相談の種類×対応の種類別』
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450046&tstat=000001034573&cycle=8&tclass1=000001136626&tclass2=000001136634&stat_infid=000031907854&tclass3val=0
- ・ 文部科学省（2017）『「今後の検討すべき主な事項（案）」に関する参考資料』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/siryo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/24/1388265_8.pdf
- ・ 総務省統計局（2018）『第1表 年齢（各歳），男女別人口及び人口性比—総人口，日本人人口』
<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2018np/index.html>
- ・ 東京都福祉保健局（2005）『児童虐待の実態Ⅱ－輝かせよう子どもの未来、育てよう地域のネットワーク』
- ・ 文部科学省・山野則子研究室（2020）『スクリーニング活用ガイドー表面化しにくい児童虐待、いじめ、経済的問題の早期発見のために』文部科学省.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/_icsFiles/afieldfile/2020/03/27/20200327_mxt_kouhou02_2.pdf
- ・ 沖縄県・大阪府立大学（2019a）『平成30年度沖縄県小中学生調査報告書』、『平成30年度沖縄子供の貧困緊急対策事業アンケート調査 報告書』

<参考・引用文献②>

- 大阪府立大学（2017）『大阪府子どもの生活に関する実態調査』
- Rossi, P.H., Lipsey, M.W. and Freeman, H.E. (2004) Evaluation : A systematic approach, 7th Ed, Sage Publications. (=2005, 大島巖・平岡公一・森俊夫ほか『プログラム評価の理論と方法－システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド』日本評論社.)
- 山野則子・山縣文治（2000）「子どもの相談援助システム構築の必要性と課題―相談システム形成の実践例から―」大阪市立大学生生活科学部紀要, 第47巻, pp.163-170.
- 山野則子（2005）「育児負担感と不適切な養育の関連に関する構造分析」原田正文『平成 16 年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書』
- 山野則子（2018）『学校プラットフォーム―教育・福祉，そして地域の協働で子どもの貧困に立ち向かう』有斐閣.
- 山野則子編著（2019）『子どもの貧困調査』明石書店.
- 山野則子・石田まり・山下剛徳（2020）「学齢期における子どもの課題スクリーニングの可能性―チーム学校を機能させるツールとして―」大阪府立大学人間社会システム科学研究人間社会学専攻社会福祉分野 社会問題研究会『社会問題研究』第69号, 1-13.
- 山野則子（2020）「子どものSOSを見逃さない スクールソーシャルワーク（1）～（10）」教育新聞社 <https://www.kyobun.co.jp/education-practice/p20200623/>
- 山野則子研究室・能勢町(2019)『スクリーニング活用ガイドー支援の見える化・児童生徒理解のために』
- 山野則子研究室・橋本市 (2020)『スクリーニングスタートマニュアル』